# 就維例

號二十第 卷 十 第



大正十三年三月三日第三種総便物認可 昭和八年十二月一日發行(條月一回一日發行) 第十 名 第十二號 川 梅 雅 路 散 發 行

# 川柳雜誌 第十卷第十二號目次

	秋春	筆菜	维 猫	J1]	潮	「潮		平月	武王	11	十七七		
江戸のうはさ	御姉無文樂弟恩	玉川研究追	丸さんのことども	柳パイロツト欄	騒」の餘煙	騒」を讀みて	句會印象	句に寄す心	<b>前初篇研究</b> (无)	柳音襲看	音字 再 始 計 本	文	
住田飢耽(三)	辻 いの助(jig) 阪井道子(jig)	本秋の屋	森東魚白	福田山雨樓(兇)	諸 家(三)	松丘町二(三)	越路米山	野二、鮎美、水車(三<)	当東	海本外の屋	住田亂耿(六)		
			_	各		日	粒	JIJ	近	不		柳	
M	紙輯	西之町M	路集	地柳		本名所	×	柳	作柳	朽洞甸	創	壇畵	
字	利の神」、	E M O	寶晴石衣	壇	(金)新世界	名物川柳	集	塔	樽	稿	作	報	
			關高	路郎、	Mic	大阪	40p	Mic	麻	麻	11		
Mi		絲	本橋	終雨	生	の卷		生	生	生			
生	নিয়		雅かほ	二南	路		鞍	路即	路郎	路			
路	The second of	त्र	7	整理(歪	郎選		馬	郎選	郎選	郎			
則	升 樓	雨(豆	選(異	(無	選(吴		一色	選(兲		-		=	



-	肩	信币		時				
ŀ	書	走		雨				
w	から	2		n				
ונעו	役	5	٠.	T				
0	12	僕		3	東			
繩	ŧ	を	×	銀				
o	SIL	絞		座	京			
	1=	b		12				
	8A	12		龜				
縄の姿も十二		來		屋				
+	+	3		鶴				
		8						
-		よ		Ħ.				
月	月	L		息区				

不朽洞句稿

麻

生

路

郎



たし遙直を傍の口之龍即池の内園公新 ごく左てつ向)幹主郎路は央中行一 (右) 氏器南宮長岡公寺王天立市阪大



主耶路で柱門の室温大たれさ張續 。 遠人柳るあて棒を譲波顕策の幹



目人三りよ右列前(浦の歌和於)會句部支菁館 、光目人六、紅目人二列中、公濠、錦分、路光 同きもら新は他。めもか日人二列後 。邸武左 (影撮三、一一、三三九一) 。志



市内粉川町弘遊病院前にて同人北川あや美君撮影) 太、路郎、関角、紫本、窓亭。) (一九三二、一二、一三太、路郎、関角、紫本、窓亭。) (一九三二、一二、一三市の祭刊した御族吟祉同人と路郎主命(向つて右より、紀

# OF OF OF OF

腹 姉 友 塞 x 金 ス 戀 薄 3 着 立 策 から 生 か 情 込 1 U 4 12 T 來 12 を 事 F た 1 1= 出 5 T > 託 良 は 妻 0 ズ 來 X 鈴 から ょ \$ ナニ ょ す 金 お 7 12 3 5 ٤ 0 0 ネ 7= に 蘭 h 金 3 を 繪 せ 8 1 1, 燈 0 7= 君 風 蝶 5 8 0 具 2 話 8 < 重 T 聲 から 有 T × ば 0 な 12 押 3 書 丽 E \$ 炭 3 叱 匂 か 待 8 n 3 12 3 0 5 2 T 0 b 更 T 松 吳 な カン す ょ 切 臺 3 3 戀 V 林 n b b 3 3,

近作柳樽

路

大 神 阪 ア

東郎

同 大 同 同 あ 同 同 九 同 同 同 同 op 門 葉 美

選



狩 掘 鐵 中 木 辨 人 金 現 Ulie 水 淚 ズ t 馘 野 棤 枯 當 3 菊 b 持 質 b 極 內 かっ 兵 を ボ to 額 h ょ を 手 取 かゝ 0 4 T 12 描 3 0 噓 怖 2 12 な 生 提 折 0 背 あ ば 孫 吊 よ ひ 4. 0 n 3 げ 71 秋 3 T 15 T ٤ す 3 3 Ш から b 3 T h 淚 T 2 0 h 不 10 多 7= し 風 h 枯 H は E 瘠 1= る 秋 平 3 15 降 0 h 5 草 景 來 子 ル せ 3 2 な は 氣 0 文 0 \$ 否 ٤ 燈 7= 背 3 供 0 T 0 字 聽 1= n T 上 13 \$ 杭 な 園 ば W 8 體 B 0 は 1 0 0 粉 3 な 3 5 < フ 眺 1= お な 多 職 B 男 15 0 小 < な ح 1 B 物 月 10 から 打 遁 む 15 3 0 から 作 3 思 崩 3 3 V > K す 米 V 2 n b 事 n h £ b

松 同 大 Ш 大 高 T 阪 40 粹 同 同 同 青 同 II 觀 可 啞 同 舟 同 ri 映 同 同 何 樓 踏 月 人 珠

### OF OF OF O

辨 5 指 醉 良 諦 幸 蓮 3 ひ H 支 は ٤ 0 75 B 慶 3 那 4. 年 8 漏 葉 寒 切 言 3 > 火 は から 東 せ 8 T U 女 0 5 中 六 n せ 75 蒜 流 坊 絉 通 ば 藥. 吳 膝 T 3 廣 8 0 V X 泉 H E 15 n 0 τ B 鐩 10 n 多 殊 3 秋 秋 苦 ほ て 12 3 U 8 b 賣 崩 更 屋 0 ٤ 3 1= から 3 憑 秋 3 T で は U 樣 Ŧī. 0 丸 橋 か 姿 0 前 10 し 12 兵 座 T 虫 T 1= 陽 3 0 n ٤ 畵 見 7= 步 獅 衛 藪 手 月 0 0 から ょ 嫁 7= 4. 子 te 冬 to 3 < 當 1= 去 É 12 頰 易 から 12 語 は 5 な 更 を > T E 夫 决 斷 居 3 15 な 摊 で 所 見 沼 b 3 b U 話 す。 け 婦 8

n 大 愛 高 嬮 知 媛 3 同 司 īE II 同 菊 同 同 青 同 同 朱 同 0 助 甫 果 朗 路



30 い 斷 詩 5 片 松 先 大 お ス バ お ホ な イ U テ 0 0 ス 師 h 纖 風 輩 1 E 島 ろ 字 " 會 な 12 12. 0 0 匠 3 £ に 0 カン プ 1 邸 社 み 先 は 横 П 腿 3 1 T 女 佐 な ル . 5 で 風 35 生 3 喋 神 溝 渡 臥 笛 鏡 0 総 車 8 3 見 紀 h 8 語 經 12 n T は 掌 水 0 \$ 椅 る 军 0 吹 0 質 匂 \$ ば 求 若 危 屋 取 子 け T 奥 T 締 に な 0 ひ 食 淋 0 10 から ば ŧ 落 襖 U 12 な 前 ٤ 4. 子 4 5 5 姉 寂 迫 知 パ を 82 冷 0 L" 育 歸 ね U 人 ル え 3 ス ば お 3 L 3 を h 0 デ D: T 73 H 座 30 春 8 喰 \$ る 來 15 來 殖 < 切 5 b 0 3 3 2 3 3 12 0 b 3 h す ょ 雨

大 大 大 Z 阪 同 同 木 司 利 [ii] 靜 可 佐 同 同 春 同 同 保 生 生 蘭 光 圭 太

### Cotoline to the contract of th

寫 篡 = 母 + 戀 搾 諦 妹 桐 感 戀 頰 職 若 ほ 眞 5 0 月 0 禁 0 > 0 す 情 人 仗 Š 帳 切 1= 0 8 落 あ ぼ 長 Ш T n 寫 0 ٤ 日 0 兒 n 8 風 坂 3 葉 3 ね Ξ 3 眞 蕨 步 寫 0 は 事 身 8 B 小 去 沫 君 足 0 3 b 1 事 ٤ 0 不 お U 父 笑 3 退 青 3 行 4. 遇 0 n な ば to 0 靴 大 嫁 鏡 1 空 か 0 h 0 ば 定 0 花 思 T 空 30 多 2 人 L 13 で \$ 父 九 期 T 0 は 鳴 る か お な 12 13 0 並 10 秋 月 辭 祭 を 名 す 似 笑 默 酒 高 0 B 5 持 × V T 12 8 专 博 0 8 す 3 0 < 3 Ш b 1= T 要 覺 3 0 多 5 T な TS 知 0 U. わ る 3 b 20 b 音 b h 虫 髮 n え 節 し T

大 長 大 大 野 阪 阪 阪 同 公 好 同 [ii] 眞 可 柳 可 司 洋 + 同 櫻 同 七 郎 弓 兒 子 美 八 2 天

### Character Contraction

こ 理 生 青 惡 名 日 ラ あ 植 地 腹 胡 重 活 > 曜 プ を 壓 想 を C 月 木 球 瓜 白 \$ 0 H V 病 13 屋 # 0 海 \$ い F で 水 A h 君 生 8 上 re 梟 0 7= 3 は 3 女 \$ 1 ٤ で 除 ٤ 言 嚏 = 寢 C チ 時 3 月 紅 から から 2 僕 2 7, < T 0 2 計 Ш から + 犬 ウ か 7 > h 7= る イ T 0 里 松 七 12 0 障 T 2 3 す ガ 目 0 > 夜 回 2 1= 子 1: 俺 3 氣 4 高 女 から な 目 0 0 0 帶 驛 b: 0 5 を 事 か 平 用 5 3 1 破 ば 0 0 2 2 h 務 0 で ょ 0 戾 肴 n 位 5 な 3 0 7= 居 也 皺 置 鮨 灯 n b 3 \$ b b 3 < 2

兵 松 大 同 a. 九同 同 巷 同 吉 同 麥 氷 同 新 同 某 同 左 刀 市 天 右 子 炭 人 街

### OF OF OF OF

机	後	童	映	發		御		行	地	-	非	お	投	臍		父
12	添	心	畵	2		世		水	車	人	常	3	げ	75		2
			15	-	96		77.				角	2			九	5
氣	2	を	Z.	日	36	醫辛	下個	は	の	お	時	n	出	V	月	P
兼	0	II	眞	£		言	住	カ	I.	<		を	L	は	號表	h
ね	連	の	似	で	省	کہ	r.	7	1	算	^	2	7=	皆	紙の	から
づ	n	か	τ	母		*		۴	ス	盤	_	L	蜻	忘	鬼	歸
,	子	12	看	緣							- 19	7=	蛤	n		3
<	12	3	護	談		0		0	٢	珠	錢	は	から	ず		を
め	付	2	婦	を		は		前	ッ	から	合	君	戾	12		柿
から	4.5	٤	戀	言		洗		の	ブ	こ	す	0	3	0		0
縫	7=	ほ	から	は		濯		煉	は	12	9	粗	座	け		木
27	不	72		82		屋			温	ŧ	我	服	敷	T		か
上	動	3	13	75		13		瓦	團	す	,,,	で	0	お		ら告
Ъ	產	草	U	b		け		敷	扇	3	姿	す	灯	b		げ
	大		23						堺		大					ß
	和		整ケ池			島取			3/8		仮		<b>愛</b> 媛			根
同	翠	同	_	同		法		同	_	同	素	同	孤	同		鴉
						泉										
	峯		馬			子			柳		月		鶴			天
						· *							10			303



僥 運 夕 五 父 交 め 友 別 2 75 水 新 FFF 慰 惡 命 n ٤ 蛙 陽 番 ייי 勞 倖 U は 里 ٤ 聞 友 ٤ ٤ 見 樣 r 4 背 + な 歸 ٤ 0 金 12 知 n 12 賴 ば h 外 12 芋 里 3 溜 0 窓 15 時 な ば 友 to to 時 10 雀 U ٤ T 儲 白 日 r い 0 息 見. 鳥 角 な 7= T る 3 1º 眉 計 < 17 轉 な 覗 惠 0 鳴 12 子 小 12 3 毛 0 鳥 車 b T 3 肩 な 10 來 ez 使 から IL: から 雅 助 島帯 12 上 ガ 7= 3 7= 下 3 5 里 蓮 3 雅 3 ば 產 蜻 食 駄 h 0 か > 35 豫 買 h す 婦 ~ 0 25 蛤 日 靴 か> 月 ぼ 0 感 T 出 T 咽 な T 住 來 曜 0 n 3 3 喉 す 商 走 る 3 佛 b 3 3 h 否 人 3 月 3 3 3 日 3

松 高 大 阪 II 知 阪 珍同一同 同 4. 同 縷 同 榮 同 明同 天 同 青 b 30 紅 吉 景 沫 坊 馬 米

# OF OF OFF

か> 3 逢 蚊 個 Ш バ あ 慕 忘 高 뜅미 灯 叱 CK 5 を n から 5 0 ル 3 院 n 文 性 5 T 23 お 風 1 re 3 n 73 ٤ 鳥 12 え 我 ほ 3 H ds 出 h T 母 な ٤ 驗 は から ば 意 1: £ 0 2 傾 3 な 力 0 蚊 な 3 あ 7= 0 靑 定 0 b 1 2 + N 死 5 7= 5 7. は E T 1= 左 重 七 73 \$ 拾 街 す 3 + 娘 チ 右 今 地 僕 燭 で 3 疑 T 0 3 ٤ お から + 2 2 肌 から 夜 か 嘘 な S 0 は 構 h x 重 ٤ T あ 1= 多 夜 灯 3 から 0 ٤ h 圖 な 7= 1 П ŧ 信 から 1. あ お 拾 \$ 豆 な 5 ٤ H E 3 C う か 1= C ラ 0 ٤ 3 12 CK 3 す 餘 W な 0 吹 5 7. げ 愁 る す す ds

et

艦

+

7

200

1=

題

3 n

きプ

松 大 大 松 大 陂 T 莞 同 榮 同 小 司 岩 同 貧 同 羅 同 沐 絹 同

3

3

るるぬ年

灯ひる

るく

路 二 樓 石 兒 門 天 子



秋 腿 朗 忍 青 道 7 П \$ チ 中 7= 傷 П b 3 5 び 白 笛 ス ヤ < 0 to 笛 空 年 1 0 か J. モ 足 30 U 3 天 ٤ づ 多 0 0 U 0 砂 ス バ 吹 3 薬 12 概 U 靜 懼 戀 ほ 0 B W B ラ か ٤ 3 立 7= 愛 12 生 T か 街 3 U n を 信 h ネ 喰 を U 道 から h ·L 才 疃 12 0 夜 世 T 2 Ž は 7= ٤ は は す す 開 話 庭 る 間 3 込 ず 頃 言 3 7 3 12 7. 0 け を 12 £ 3 12 から む 君 U 灯 池 姿 n 無 T ば U 3 \$ 赤 彈 0 0 晉 B 0 事 吳 狂 0 赤 0 す 廣 水 15 礩 カン ٤ か から 冷 ネ は 1: n す ٤ ٤ h h 子 豆 n A h す n 1= 3 h 0 3 h 3 び 1 た か < 窓 II. 母 絞 3 h 鼻 3 3 ぼ T 3

張ケ池 大 大 京 大 大 高 阪 都 ZI. 阪 臤 知 阪 四 竹 巷 君 葉 啓 杏 青 同 朝 同 同 ŀ 同 無 可 限 葉 E1 榮 光 秀 雅 Ξ 丽 同 居 城

### OF OF OFF

鰄 寢 失 反 火 非 忌 + 拓 追 病 空 幸 さ水 から 返 古 鉢 常 明 B 学 想 漏 人 榴 憶 昌 5 B 1: H 3 臆 か 時 から から 10 0 神 0 0 歸 3 0 病 n 3 0 身 時 3 暮 子 秘 薄 判 T U 呼 日 1= ば 日 淋 東 供 荷 誰 計 CK 本 1= 12 苦 出 1= B 3 な 父 ひ 京 n 3 込 12 7= 15 12 蝗 2 0 0 £ か 8 ひ す ょ 角 0 3 放 T 0 3 1 T \$ 3 力 俺 ٤ n 任 プ 串 6. か b h P D 秋 " T 子 3 チ す ٤ 主 0 似 3 n ٤ 爪 3 0 深 多 羡 は 窓 匂 T 17 12 云 義 債 T 問 8 3 す 夜 集 2 2 小 燒 12 0 0 3 權 か 屋 10 す < な 長 金 嫉 3 借 V 7= 街 湝 人 妬 否 3 父 星 E 3 < 82 3 3

整ケ池 大 同 石 JII 阪 既 治 都 Z 泊 佳 紫 紫 喜 SI 柳 波 U 尖 F 世 青 重 富 美 ٤ 衞 都 夫 草象 波 陽 Ξ 由 古 次 樓 U 可 迷 童 香 六 子



プ ゴ 公 毒 童 稻 慾 檢 釣 行住夫考生 母 113 休 舌 魚 か ٤ 查 0 C.W 中 13 幸; 宅 れを 活 H ズ 0 上 b 居 所 0 多 月 箱 行 地 障 あ V 12 T 記 につ は 捨 1 田 同 To 子 2 女 ٤ T 出 事 世 梵 T 2 金 す ナニ 給 2 舍 洗 U 3 整 10 妻 5 間 ょ 1 ア から ٤ 0 乳 T 75 直 驗 賴 3 な 8 重 は 17 要 ٤ 12 母 屋 我 12 3 のし から 25 1 7= V サ 0 腕 承 ٤ 暮 12 h 4 は あ た から な 間 T 會 疲 諾 凾 ٤ 怒 夜 4. 3 ٤ ٤ る 堂 n から T 子 から 0 T 71 づ 良 n は 1= 0 ば T 見 出 3 交 行 n 悲 鏑 話 L 3 來 3 < 氣 < b 話雲

同 Z 好 小 三流 祥 曠光 蝶 十 靜 T 柳 喜 7= 鐵 11 蛙 貴 啓 け 代 見々 靜 波 路 夢 郎 を 吉 都汀月 念 志  $\equiv$ 松



狂 十 野 感 勞 叔 女 天大大瘦此容霧 靈 生 御 蓮 瓶 日: 活 月菜 板 將 見 燈 T 0 0 の知 15 車 除 12 走 生 拔 H は 3 0 餘 蚊 背 齊 Lo 夜 本 3 3 瞳 廣 務 ス のづ 裕 5 b: T は 娘い 獵 刺 B ŧ 12 \$ はた ス 杏 た 近 は 中 好 0 へ行 ぼ 3 霰 忙 12 所 晚 12 幸 3 5 3 來 な 愛 下 暖 3 秋 想 駄 7= 事 月 h 3 0 果 TI 2 見 T りび所で程 雲 宴 音 垢 7 力 しる 3

芳元 詩佐赤栗角力 子 清 茲 一 梨九春い 花 文 津 兒 プ 岸山郎美陽 丸 彌 鬼 園 羊 生 錢



突 日 說 0 术 金 娘 辻 神 斷 愛 Ш 洲 人 朗 然 稼 h B 0 教 水 人 0 樣 0 生. 行 聞 か> ラ 0 ZK. 3 嘘 0 は 0 から 弱 者 多 町 30 塔 0 12 知 12 b F T を 嫌 通 出 蠟 信 此 有 乘 事 老 ٤ 子 - 1: ۴ 2 から 知 來 朝 12 男 U 供 虚 1. 燭 U 舖 T 處 意 n 0 0 7 12 役 1= 0 榮 0 切 グ ٤ 足 12 義 ば 鍬 12 子 日 見 バ 塲 額 晴 0 女 3 ル 知 8 12 友 迷 付 供 本 5 0 ば 給 12 衣 幾 77 0 T 憐 酒 達 ひ か> 褒 V 晴 分 を 泣 は ッ プ あ 音 1: b 八 か 客 n 0 步 8 信 12 1= 4. 未 並 遠 b 赤 稻 8 な h 3 牛 は 挂 3 U 入 T 1: 1 2 T 1 摇 滿 女 T 15 0 見 若 n 夫 \$ 黑 る 5 B n 7= か 居 3 T 5 3 3 3 婦 L b 子 3 h 3 3 居 鏧

大 大 数ケ池 大 松 同 大 阪 阪 ζĽ. 薂 褪 良 久 守 遊 ラ 朝 愛 義 白 3 丽 美 프 紫 寥 美 汀 之 イ 風 0 津 佑 子 雨 子 子 菊 帆 3 杯 蛙 知 人 王 声 女 雨



#### 111 柳 音數 律 0 基 本

智 識

住 田

亂

從つて不備な點が多々あらうと思ふ。之については大方七、五の音脚分類表を記す。(この表は、私の考へたも 耽

ものを研究する必要がある。例へば言葉の匂ひ、色、深淺、輕重我々は大體音數律に入る前に、もう少し、音樂的に深く言葉といふ 落丁の多い一冊の本に似た人間である。こんな人間だからこそ、 あるが、そして私もこの無暴を敢へてする一人なのであるが、こ 之を深くは究めずして、音數律論に入るのは、 音の强弱等か少しは知つておく必要がある。 がっちりと纒め上げ得べきものでもない。 やうとするのは、やゝ詳細な音數律論で、之は二頁や三頁で書き 本誌五月號で「十七音字検討」なる一文なものしたが、 の事は他の専門家に譲つて、直ちに私は音數律論に入る。 くし得べき。のではないし、俗務に忙殺されてゐる私の早急に のな研究する必要がある。例へば言葉の匂ひ、 いつたやうな無暴を企てやうとするのである。この點はごうぞ はば私は之を書く前に頁を大分飛ばしてゐる。 所論のほん、一部分であり、プロローグなのだが、今より述べ かなり無暴なので 私といふ人間は あれは私 のので、五、 の御教示を仰ぐ)

F	$\mathbf{E}$	D	C	В	A		
定	式	式	完	式	式		
2 • 3	2 • 3	3 • 2	3 • 2	3 • 2	3 • 2	音脚數	5 (第一格)
4 (2 • 2) • 3	4 (2 • 2 • ) • 3	3 4 (2 • 2)	3 • 4 (2 • 2)	4 (2 • 2) • 3	4 (2 • 2) • 3	音脚	7
$\overset{2}{\overset{\bullet}{\circ}}$	•)•3	2 2	2 2	3	2 3	數	第二格)
2 • 3	3 • 2	2 . 3	3 • 2	2 • 3	3 • 2	音脚	5 (第三格)

、吾敷律なるものと親しみを覺えていただく爲に左の如き標題先づ音數律の基本智識を說く前に、順序が甚だ顚倒してゐる

悪しからず御諒承を乞ふ。

晋數律より見たる五·七·五·の基本形態分類表

J	I	н	G	F	E	D	C	В	A	事と若廣に更・しい。						
式	式	式	式	式	式	定	式	式	式	を 立 立 さ う さ ら は こ の 五 う す る の 五 う す も の 五 も の も る る る る る る る る る る る る る	L	K	J	I	н	G
低く飛ぶ)	誰へと	萬歳の	このまんまでは	縁日の	箸紙を	俺に似よ	女湯で	血天井	うろこち	にする。 ・五・五、五・五 しさうするならば ・五・五、五・五 ・五、五・五 ・五、五・五 ・五、五、五・五 ・五、五、五・五	式	式	式	式	式	式
ši)	ともなく		んき		父		) -/	-17	ちう	一・5は	2	2	3	3	2	2
編)	()	型で	では	角	お	俺に	宅が	話に	100	諒。 `七	3	3	2	2	3	3
幅をみる)	不平あ	沙)干	と妾も	帽時事	うついて	似るなと	宅がの	知つて	(	しの七五 て型音・ 戴式字五		2	2	2	3	3
5/	b /	の <i>)</i>	1	を	か		の		٤	くにのも 爲就全五	3	3	3	3	4	4
11百量	雨の豊)	蟹怒り	然がつき	慎	いてやる	子を思ひ	ろけやう	をく所	沈むなり	に、型・五の大は、大の大は、大の大は、大の大は、大の大きない。	2	2	2	2	2 • 2	2
	5	, ,	- /	21	-/		- 1		- /	一他十七					_	_
皮	亂	町	飯	台	同	路	柴	舟	Щ	杨儿 一 开门、开门	2	3	2	3	2	3
de.			HA	ン	1.04	-11	//-	,	雨	例句を製造し云	3	2	3	2	3	2
部	耽		山	坊		郎	舟	次	樓	行を りづる は れ と なる。						

ろうつ 系統の特性の槪略を述べる前に、私は先づ一音に就て少しくか即ちこの二音、三音は、日本語の根本作用なのであり、この二も、凡て二音及び三音といふ音脚から成り立つてゐる事を知る に生きてゐる事を發見されるであらう。 いたゞきたい。同じく五・七・五といひ乍ら、暫くこゝで右の表と例句とを一々引き合はし K 式、 L 凡て二音及び三音といふ音 式 相談をし 陳列に ノは二音、 勾配の要る 直線 女湯は ても、 は三音を示す 手を叩き 壽司 右 屋 の表に表 也) 夫々違つた音律して熟讀玩味して れた句をみ 竹 ほ

T

人

3

「一音は音數律上」 る事旣 一音は一音と合して、二音となり、二音と結合しも之は明らかに判る所である。即ち一音は獨立し る性質のものである。 存在する如く、二、三、 音する場合「雨 立して存在 と言ふ、 岩野說、 しない 福に、立、士於、性、 U 一戸」、「スヾー 於てはる 從つて二音、 又之を卑近な例にみても、 説に私も從ふ。 **紀つて二音、三音は日本語の根本作用な音或ひは四音として音數律上に存在す一音となり、二音と結合して三音として** はい 定

ーメ」とは言はない

事をみて

て存在せず、

雨戶、

-一、夜・豊――雨・日、である。 春犬·夏猿 秋雉 . 風

音はそれん れな~位置を交換して、一冬・一甲・乙・丙・丁

口の中で口吟んで

音は 雀を發 -( 19 )-

で存在せず」

他の二音と並べると調子であると、次ぎの三つの結 調子づき、 保存在を保 保 保出 つる

向 から れ、その 連 行行の 關係 がに於 一音といふものに他の形體に働行っておる(即をした。他に折りた他の形體に働いた。 形居形體り間 生する。 をも

續 「速度」が發 L 反覆せんとする

二音に於ては、その諧調を湛えながら、直ちにその形體を呼び起し、或は呼び合ふ機能を有つて居り、かがいた。 である。だから其處から命として先づ流れ出たところの諸調のかがきる。日本語に三番及び二音系統の言葉の多いのものである。日本語に音のである。日本語が滑いてある。日本語に音の環点といるを明確にそのに動いて、音数上の相違を明確にするといふ作用を有つてゐる。との性質があればこそ、吾々の意識を動かした数的統一との性質があればこそ、吾々の直接意識のもとして別みである。けから其處から命として先づ流れ出たところの諸調の意識に對抗し、日本語に音数律からの種々の作用を産れる。 利はこれを「二音の環」と云つてゐる。或は單に「環」とこのである。 利はこれを「二音の環」と云つてゐる。或は單に「環」とこのである。 一番語に当の環点である。可能動的な性質は二音といふまる。 一個を刻むその能動性の發動の原因である。 一個を刻むその能動性の發動の原因である。 一個を刻むその能動性の発動の原因である。 一個を刻むその能動性の発動の原因である。 一個を刻むその能動性の発動の原因である。 一個を刻むそのに動性の発動の原因である。 一個を刻むそのに動性の発動の原因である。 一個を刻むそのに動性の発動の原因である。 一個を刻むそのに動性の発動の原因である。 一個を刻むそのに動性の発動の原因である。 一個を対し、日本語に音数律からの種々の作用を産れる。 一個を刻むる。 一個を刻むる。 一個を刻むる。 一個を対し、との表面の弱さにも似っ置なる。 一個を対し、との表面の弱さにもの形體を 一個を刻むる。 一個を対し、との表面の弱さにもの形體を 一個を対し、との表面の弱さにもの形體を 一個を対し、との表面の弱さにもの形體を 一個を表面のである。 一個を表面のである。 一個を表面のである。 一個を表面のである。 一個を表面のである。 一個の形態とのである。 一個の形態とのである。 一個の形態として発力である。 一個の形態とのである。 一個の形態とのである。 一個の形態とのである。 一個のである。 一のである。 一のでなる。 一のである。 一のである。 一のである。 一のである。 一ので が促し出したのである。日本語が滑かで二二音及び二音系統の言葉の多いのもこの環」と云つてゐる。或は單に「環」とも 種々の作用を産むにり、他の音數の存のもとの大きな量に して刻み、 的統一體 も

して、

は溶解し得ない共通してある。

重がで暑 い相反い

力互覆。 がにに寒

張相はい

では、・暖い・

機能三

能や吟味してみる二個なり四個なり

朝 りというない

ふ様な調子

がその

質

馬鹿に・つける・一楽はない (1) これをよんでも、三音の澁澤の性質ははつきり判るのである これをよんでも、三音の進澤の性質ははつきり判るのである。 といるである音數を境界にして、自己を他から切り離してゆるである音數を作用を産むことに成るからである。野雄は同時に切斷、それは澁滯し切斷してあるである。野なには成つてゐるをからである。即ちもし三音が日本語の音數をなす主體であり中心である。即ちもし三音が日本語の音数をなす主體であり中心である。即ちもし三音が日本語には成つてゐなかつたである。即ちもし三音が日本語の日本語が與へるやうな感銘は全く別のものにしてしまったは澁滯し切斷してゐる特徴が著しく増し、このためにアクセントも新たにつき、ストレツク(力づけ)も多分に生れ、それは澁滯し切斷してゐる特徴が著しく増し、このためにアクセントも新たにつき、ストレツク(力づけ)も多分に生れ、それは澁滯し切斷してゐる特徴が著しく増し、このためにアクセントも新たにつき、ストレツク(力づけ)も多分に生れ、それは澁滯し切斷してゐる特徴が著しく増し、このためにでなった。、二音特有の諧調が餘り二もよく行はれ、そのでなつてゐたら、二音特有の諧調が餘り二もよく行はれ、そのでなつてゐた。二音はない、締ちのとはない。 ては緩い、締りのないものでは緩い、締りのないものでは緩い、締りのないものでは緩い、

究する。

百は二音と反對に、

重々しく、

強く、

澁灣

する

例

へば、

大體二音の性質

は、

之位の程度で止め、

次に三音を少しく研

(日本音數律論P.271-P. 72及びP.306)

3

暑こ 一四、

ら福かる のを習慣としてゐる。切點といふのは、意味の如何によ 成 であ

不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類
「不揃ひ。子供等。愚劣な――第三類

て、これから説明して、これから説明して、これから説明している。 しやうとする「撓ひ」(STRESS) SSS)といふ現象の順序如何による ふ現象 る五

を起す。そしてこの撓ひの現象と、前述の二音の環とが、相互を起す。そしてこの撓ひの現象と、前述の二音の環とが、相互を起す。それて、三音化しなければならぬことも勿論である。 いたがつて意味の必然なる要求とその徹底により、二音の境地三音といふ單一體になる。 櫻を單にサクとも云へず、駱駝を單にラクとはいへないのである。 したがつて意味の必然なる要求とその徹底により、二音の境地三音は、意味の必然なる要求とその徹底により、二音の境地三音は、意味の必然なる要求とその徹底により、二音の環地を起す。そしてこの撓ひの現象と、前述の二音の環とが、相互を起す。そしてこの撓ひの現象と、前述の二音の環とが、相互を起す。そしてこの撓びの現象と、前述の二音の環とが、相互を起す。 ず境、地 E 3 事 וועל

てその個所を無理に發酵する事にもなる。 たとへ一音といふ微少なものではあるが發生上の一つの努は、たとへ一音といふ微少なものではあるが発生上の一つの努は、たとへ一音といふ微少なものではあるが發生上の一つの努は、たとへ一音といふ微少なものではあるが發生上の一つの努は、たとへ一音といふ微少なものではあるが發生上の一つの努

T 行つれ つてみやう。 智識 とし て、 例 何 を研究の 對 象として

ち、 をなしてゐるのである。結びついて我々に、內容 然しこの句をよむ時は、この意味の通りには、と」を上齣とし、「妾も慾がつき」の下齣となる。と」を上齣とし、「妾も慾がつき」の下齣となる。上部の作用によつて、「M.KA-KEMO」とよみ、二品等も」は三・一音合成の四音であるが、之を發展して、「このまんまではと、妾も、慾がつき しく力を入 の現象が起 性が働らいてゐるの 「このまんま」で輕 て我々に、內容を非常にちよつと澁滯を感じて、 30 てよまね 即ちこれをよむ である。 ばに < 切れ 5 次に D る即 時 「つき」といふ連續性の 深く廣く擴大してくれる作用 であ 「ではと妾も ちまんまといふー 我々は「では る。 اغ 上まな 0 個所 の所は少 音の停止 といふ で撓ひ 4 0 即 は如切山

この日式 りて 、が「T」と言ふ母音の連續と、二音の環によつて快よいの中七に於ては、(Chi Chi Ochi Tsui TE) と初めの四 三音 は上五の一 切 n の「箸紙を」の意味の 輕い停止による或る落着きを出 父おち) 0 切書い るがでる で と初めの四音の終 U 「 文おもつい 国の上に於て

い氣持をよむものに感じしめるのである。に音數律的に効果をもたせ「やる」といふ二音によつて、 つわる 三音を用 τ 初をな 」の三音 してもつて來た所は「おちついて」といふ意味にしてゐるのである。 更に「下五」に「書いてやる 0 所で撓ひがか ムつて中 五」に書いてやる 七を完全に 生 温か かし 更

例るか 同句の の の が く の 如 く の が く の く 一層はつきり 一究は、讀者諸氏に之をお委せする。こつきり肯けるのである。 ば名句 0 名句

之で私の川柳音數律論は一先づ終るのであるが、「きやり」十月號に於て、海野夢一佛氏の「言葉の流るゝまゝ」なる一文をよりないのではないが、あの文中に於て見つめても 戀 しい た しに ならぬ 空見つめても 戀 しいた しに ならぬ 空を、「五四六二」によつて十七音字を構成してゐるものであるとかゝれてあるのは甚だ諒解に苦しむ。この句は前述の音數律で片付けるならば見つめても 戀しいたしにならぬ 空間を一名・5・2 12・2 15・3・3・2 2 となり、明らかに定理律で表の4式の句である。 意味の上からいつても 一五・一四・三・一三・二

5 となり、「戀し 

> あるわけである。叩う介をつよ、二・二音で合成であるといふ見方と、三・二音で之は甚だ大ざつばな言ひ方であつて 四 五・ とい 3 成 \$ T の合成であるといふ見方が、この五音格を二・三音の 由 律だと T おら n

だらうと思ふ。
さい、私は最も用意した言葉の氾濫或ひは緊張によつてを、私は最も用意した言葉の氾濫或ひは緊張によつでを、私は最も用意した言葉の記念のでいる。「殊にてというと思ふ。 んで字の如 りながら、 る 如く、韻 韻律整はざるものである」と夢一佛氏は言はれ、五七四等の短縮となつたもので、破律とは讀意はる言葉の氾濫或ひは緊張によつて、六七五 るの用 てなるも 破調こ

私は破調を認める。之は正真の破調を換れたからと述べくどくと筆を執つて來たのである。

私は破調を認める。之は正真の破調を換れたから
を変し、とのである。
はい、川柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、明柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、川柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、川柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、川柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、川柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、川柳音數律をかいたのも質は凡手の破調を換れたから
なが、川柳音數律を執つて來たのである。

### 春 秋

# 補

魚

1 h 就 馬 乗る の岩黨

h

更に」海鈴 載 あるのを發見した。 ふ馬な此 方が する所を紹介してみやう。 0 たの 正蛭 から る事 子氏の 集覧 解 芝!にも同意味で詳しいな事は書き添へて置い、荒れ馬と云と どうも であ であると思はれる。 解の「荒い 明 つたが、矢張り、 確とは自分乍ら マ、参考に兩書の 味で詳しい説明の 添へて置いたが、 れる。あの際はね馬」と云 上り

俚言集覧

か ケといふアガリ馬有け あがり馬【古今著聞 とも 大法を行は けるを房官に給は しら T で乗あ げにはかく 知り にさしも せたまひ たる人道 b 集 きける程 のあが 乗りたまへるぞ せ V h 一六十 こてけ るに 何れ E 5 逢ひ h 51 0 頃六アシ ひて此ある時 御堂に せられ ア ガリ

> んに ゝるにてんさ (海錄) は馬 衝 7 力 IJ 破 たり 馬は にけ h < V V 腦 かっ 3 3 せ b に前 馬 さまに落 かし 也 P 足をあげ 伊勢氏の説 T か T ける T ガりて 切自 そ立立 事なり をさんざ 多 にアカ 0 つ馬 なけ JES.

なり、 馬の名、 なり、 すべ 條に、 何がある。 と記されてあ 也前 といへり、 あがり馬 と云 足二 口 古 强 騰 馬書に見えたるもの少からず 、然程度らに可い仕也 3 腹帶に縄を入て、あがり医 h つの間へ取てく 馬東 乘る つめ候へば、 0 7.0 云一 ٤ 叉 ž, 5 俳諧騰に次の 馬に つわにからむ 引返し 犬追 をあがり へ馬ころぶ 一、あがり は縄をさ 六日之 結附 政清

が牽 10 あ n i 照し合はしてみると、 ٤ 前句)大?の て其氣を鎮 り馬一 から 9 3 のであらうと思はれ 寺を出て昔に歸る上り 寺から里 たが、 めさせると云ふ様な事 關係があるとも解 へ馬のとむら げられ しん 0 真くふて 荒れ馬を寺 ٤ 30 た武玉川 け 馬など ひと云(佾俳 3

# 江戸のうはさ

Lansern

ごも、東京の□▼野球ファン 介してみやう。 久球して 川柳家早慶戦リアンの顔觸れ此頃一季節外れの 感があるけいの話といへば、秋のリーアの なれ終

早大フ 大ファシ…太郎丸、超兒、大ファン…迷亭、桑二、壽 その他無數 雨吉、 玉他鬼 朝數

三太郎、雀郎 劍花坊、久良伎氏は三太郎、雀郎 一刻花坊、久良伎氏はお客判といふべきき所か。 早慶第三戦に 接戦い結果慶應が勝國民柳友舎が催され、これらファンか しものがあつたさうだい、然しこの年の天下岐れ目の戦がすむと、 伎氏は 年に二度がなりにこの年に二度が勝つた夜 31 0

3 いに賛意を表する。 を機會あれば聞きたい でまた 9×110 東 (含あれば聞きたいとの事、私も之には大いとの和尙は川柳家の都市對抗廨雀大舎) (念寺は、一面川柳家縣雀クラブの觀いお る。

まして、この人が麻雀四段の腕前である事な、腐雪は、閼西では知らない人が多いだらう。▼雀の子といふ 柳人が故飴ン坊の子息であ 阪での「萬よし」と共通點をもつ。 かつた。何時でも誰か來てゐる所、かつて大いつた。何時でも誰か來てゐる所、かつて大壽山、劍珍坊、迷亭の諸氏に重识てお目にか 西の子とい

ご知つてゐる人は極く稀だらう。 東念寺で四莊戦はしたさうであるが る。彼氏某日、 「點では、正に出監の響れ高き御曹子でてゐる人は極く稀だらう」

相も

變らず

仲の 良 1. 11

柳

家

٤ な

あさ

5 ñ 3

### 追 秋

りし前 3 た説に 4 由 揚馬の 0 て、 蛇足ではある と書いた例を一 宇治殿 るがか . つ舉げ あ判が明

談卷

之六。

云

2

ŀ

御ラ云々

シ他

レマロビ他人ヲ乗 花形

及、

レバ云

次 臥

「本朝細 宮を時高院 城好い名の つみかの御 有る。 馬で 学の あ ゞ思たりけん、 て乗けり云 がり馬にてありけり 集上 馬也。 る事 卷。 に就 とく 走りの 宮城 つて跳 10 あがり T 極 0 左の記事が めて 條 云 馬 の宮 次 はやき 條 城銀 0

b 次 n ねの事にて、 審なの **銀時たゞ落しとみせ** は、 上り 玉をとるやうに上 馬と寺院 し程に ٤ 0

蛭 生

から

芽を

出し

とる

せ

は此

枯

れ

0

を引き抜いた

大の

男が此

ふを

d)

30

そうです。 する文 騰馬 E と寺院 3 B ٤, 0 彻 事 情を、 釋 0 全き 明 が瞭

> 頭 巾 就 T せ

たと略 であ を申述 やる鷹を鎭 か頭 ふてしまふのであらう。 ら胸えまで を包 た際を 綴ぢたやうに見えてゐる、 0 3 べたが、 7 **えまで被はれ、胸先に紅み嘴の邊が少し開いてみ** 似たものであつて、ス 据え の筆、「鷹かゝみ」に、 めて置く爲に てゐる圖を見た。 頃日、 先 河鍋洞郁 斯く眼 恐らく逸 る ス ぬまで覆 て、 ツポリ 想像し 頭巾を Vi 眉

和八年十 一月十二 H

井 道 姉

受けてゐ から 下れ和 からを 黑い帽子を冠 · の葉蔭に、 30 に、一ツ又一ツ、可憐、母顔と吾天下なりと蔓を延した雪の 8 額にも足らぬうち 姉ちやん JU 五日 つたまゝ 此の言を用いん(笑ふ) を敷 7 同じ陽差 あ 加 0 庭に、 る小 n 朝十 春 L 類四

▲だらう。餘談ながら私は紅の名譽の為に、こゝでは明ら 相人

同舟會」が生れた。 諸氏

集

り花

▼十月二十九日、國民川柳會催さる。之に就いては、詳しいニュースが入らないけれざもい、双大いに力瘤を入れてくれた蒼々亭のくれ、双大いに力瘤を入れてくれた蒼々亭のられ、双大いに力瘤を入れてくれた蒼々亭の信にかつもながらの盛金を 私は此夜はるかに前つた。
▼十一月一日、きやり句座。参會八十名。選下十月二十九日、國民川柳會催さる。之に就い、新聞揃ひで大いによき 収穫があつたさうである。 十月二十九日、國民川柳へこの會の今後健全なる登 國民川柳舎催<sup>8</sup>

▼十一月三日、みその吟社の創立句会は、きいりに劣らぬ位の盛会だつた由。この吟社の作品の学校の茶六氏の 鼻の高度又推して知るがし。
「中に又書ます」と記されてある。之を原稿の中に又書ます」と記されてある。之を原稿の中に「その中に又書ます」と記されてある。之を原稿の中に又書ます」と記されてある。之を原稿の中に又書ます」と記されてある。となら、まで、氏の財道の為大いに観意を表しておく。
「中に文書ます」と記されてある。之を原稿の中に文書ます」と記されてある。之を原稿の中に「その中に文書ます」と記されてある。 人である。

倒人、玄六、花川洞、零雀郎、迷亭、玉兒朗、 月十一 今後 花川洞、零工、玉兒朗、 毎月 日……雀 回開催して各自 琴壯, 苦笑子, 太郎 "。夢一佛, 啞三味, が目的ださうです 郎居に於て、 ロのうんち JIL •柳桃 0 不 丸

アタ しかしあたらて面白い言葉もあつたを棒に振つてしもた、な、姉ちやんふ1ん。ばやな奴やな、あたら一生 かし……姉ちやん石童 ラ、 落ちた 妙な言葉やな 意味ない様で意味がある 丸 のお父さ

じやないの、 そこにあの人の人間味 やと思ふのに」 つて權勢を伸ばす、そんな人ばかり國時代の武將なんて人の首ばかりと 箙の梅の物語りもある が親が へる 0

常を悟

つて世を捨てゝしまつた。 櫻が蕾のまゝ落ちたそれで無

戰

0 t

杯に

ンチメンタルな人やな、花見の をてあの時代の人に似合はぬえらい

よーしそのかわり八百屋へはあんた となつた、蒸してほしいな」 どんな非道 面はある筈と思ふわ」 い人にだつてきつとそう が喰 ~

が行くこと、

すぐ火はこさへとくか

前に洩るゝをふせぐ荒れたる住居さゝ 菜ツ葉服の弟 5 肉親はよきものかな。 オーライ、 雨降る日は盥を持ち出して簞笥の どうも 風呂敷をさげて出る。 しよがな 一人子二 5

> すでに過去の存在となった、 ごりよう、 ぶんらく

なつ

か

いその名、

よ永遠に止まれ。 P かなる我が家、 よし貧しくとも微笑

### 徿 靈

士 の 助

ぐと味った、 藝術の匂ひとも謂ふべき い氣分の漂よつた、こやうちに浮瑠璃 そしてどことなく、 ようぶんらくの木戸をくゞつた、 自分は、 はぐゝんで、水た、ごりようぶんらく。 ごりようぶんらく 傳統をもつた藝術を、 しばしくこの名を慕つてごり いんきな古めかし 8 ながい間、 をし 3

抒情的な吉兵衛の三味に、 の名人的技巧に、 名匠越冷 彌の枯淡に、 も聴いた、 自分は心ゆくまで陶 先代清六の さては先代南部 文三、 一般に、 玉藏 0

> かふ顏觸れを書いただけでも、すばらしい会社苦、三太郎氏等は多用の爲缺席された由。雨吉、壽山、しげを、茶六氏等多會居魚 であつた事が充分にうかゃへる。

く感謝致します。▼久良岐氏より 路郎氏及び小生へ半折める。氏の多幸を祈る。 こんな歎きを私も一度味つてみたい ものであつても足りません→歎いた手紙をよこす。▼茶六氏……句舎、觀劇、廳雀に身體が幾つ L 70 深お

さい。 來る昭和九年新春號を刮目、期待してゐて下來る昭和九年新春號を討る。諸君、この珠玉の名篇に本誌新年號の爲「演藝今昔名譽帳」なる一篇本誌新年號の爲「演藝今昔名譽帳」なる一篇本誌新年號の爲「演藝今昔名譽帳」

▼尚ほこの頁で我慢出來ない人は、東京から先づまづ盗疊危ふく成功といふ所であらう。 江戸の模様を諸君に傳へ 得てゐるとしたら ないけれご、之によつて、たとへ幾らかでも全貌なうかゞひしるなんて事は 勿論のぞめの狭い視野からか いたから江戸の川柳界の▼今回は何分にもこの頁開業早々の事じ、私 柳人」等々々を本誌と共に御愛讀下さらば幸發行されてゐる柳誌「國民川柳」「きやり」「川 之は全日本柳界の爲、こゝで敢へて提灯を

記宛ごん~~と送られん 事を全東京川柳家この頁の記事になるやうな御通信を、今後左 ▼「時々は江戸のうはさもきかまほし 希望する。 兵庫縣武庫郡魚崎町五九八

宛

25

# ·大 阪

0

卷

る夏木 祭棚 は ん四 松 に天々 佳玉 好 時寺評 を投ぜて既に 6類道 れ港頓 たご場 い類 い大 て服

六

新

#

# 麻 生

路

郎

選

大 西 長 Date: 郎

畵

世 天 51 世: 足 凡 世 天 2 閣 界 事 界 袋 な 界 V 閣 界 通 12 を を 諸 通 話 を 天 Ŀ 大 家 先 脫 閣 n 天 辻 から ٤ 行 しつ か ば 閣 す 人 司 無 C 0 は 煙 5 常 3 遠 郎 廻 3 寒 b 2 2 夜 出 0 82 お 5 F 方 か 1= 方 T 新 12 新 新 來 新 \$ 0 15 世 煙 折 2 向 世 世 世 界 界 界 h 5 3 風 界 n b 葉 新 Ш 11 は 松園 るを 市 平 US 街

新 白 平 新

新

世

2

3

顮

T 味

3

通 新 通 食

新

界 界

褒 大

To 衆

は

E 言

h

底

0

=

から 來

鳴

新 チ 案 は 新 朝 通 鳗 新 新 新 通 111 内 世 世 天 t 世 天 風 ナ 閣 界 閣 界 0 呂 界 界 Ł 界 12 誤 今 バ 喧 海 冬 豫 ル 拔 2 ラ 1= 嘩 \$ から 植 般節 > 匂 ナ 定 ٤ 間 8 ナニ か 0 8 75 幽芳さん 自 科 鰌 夜 起 5 近 刑 幸 的 掬 カン 殺 白 事 しつ \$ 0 間 12 7. 言 2 2 T な プ な のこ 0 飲 高 n 網 0 は る 7 à ね ば to 3 30 T 新 知 か ٤ 1= 新 新 新 な 世 世 5 ラ 張 3 1 ٤ 世 世 否 世: 界 界 界 界 す b 燈 2 b 3 紫 2 か 變 亩 百 同 Ш 亂 水 丽 ほ 車

光

樓

水

石

新 新 新 新 新 新 ほ 世 世 世 世 世 3 111: 界 界 醉 界 界 界 界 親 短 サ ス 歪 2 氣 12 で IJ 11 廻 h 13 叛 行 70 0 ラ n 目 B 0 4 足 V 右 香 8 ば 黑 0 7= U 0 袖 具 1. る 師の目刑 顏 T 足 51 眼 3 見 .10 3 8 鏡 ٤ せ 新 刑事の目 踏 な る 直 世界 3 3 3 b Ш 艸 同 鶴 57 雨樓 樂 峰 次 秋

新 通 白 世 天 粉 界 閣 燒 芝 子 け は 供 0 × 女 b 0 カン ょ 追 2 0 8 × T 越 3 案 す 字 から U 新 X ٤ 3 世 もり 界 せ

新市

街

たけを

同

名所名物川柳は柳友諸君から多大の興味をもつて歡迎 んことを切望します。 せられてゐますので、 曾て此の地に遊ばれた方はつとめて應募され 先づ北陸の卷を募ります。 漸次各地の紹介に及ぶこと 北陸の柳友は勿

日本

大 岩 阪 お 0 2 卷 U  $\equiv$ 句 麻 生 十二月三日締切 路 郞 選

+ 陸 0 日 卷 戎  $\exists$ 安 句 111 久 月 流 三日締切 \* 選

北

1

不 公 (以上投吟先 園 知 Ξ 旬 本社 月 月 事務所宛 Ξ Ξ 一日締切 H 締切

芸

句

貌 親

六

E

は

4

h

~

0

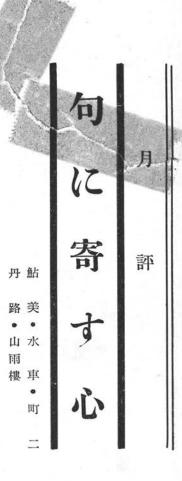
色

0

新

世

ימ ほ 3



近作柳樽より

# 父らしく見えねどしみる兄の臭ひ

水車 ―― 何時までも 自他共に若いく、と ゆるしたつもりの、早や交くさくなつた。 ほふと行きたいところしみると したのは老 ほふと行きたいところしみると したのは老 ほかと言へば弱いが、偽はちぬ自分を詠つた。 らかと言へば弱いが、偽はちぬ自分を詠つた。 らかと言へば弱いが、偽はちぬ自分を詠つた

うして、相當複雑性もあるし、作句態度もしされたこの句をじつと味はふと、なか~~ざされたこの句をじつと味はふと、なか~~ざめりませんか。一讀した時は單純なものしかありませんか。一讀した時は單純なものしか

町二 ―― 舟々氏の持つよさが 出て居ると町二 ―― 舟々氏の持つよさが 出て居ると思ふ。若い父と子の乳臭とが感じられる。かうした句の持つ感じ弱さは、道説された弱さであつて、真質弱いのではない。「兒」としたであつて、真質弱いのではない。「兒」としたのは幼い子であることが 意味したかつたゝめであらう。

ればそれが多分数はれると思ふが、それではころでこの句は「父らしく見えれご」と「しころでこの句は「父らしく見えれご」と「しころでこの句は「父らしく見えれご」と「しいの方が適富した文字だと思つてゐる。」と

山雨樓――事質な そのまゝ叙した句のやうであるが、その事實感が盡きねユーモアをうであるが、その事實のカツトが焦點をうまくっかんでゐる。事質のカツトが焦點をうまくの顏を毎日見てゐる、尊質のカツトが焦點をうまくのある句だ。

町二――大掃除を詠んで 才智をみせた句は古句にも相當あるが、やはり彼等は觀念化は高に確かに違い處に遊んでゐる。この句の佳さは鑑かに違い處に遊んでゐる。この句の佳さは鑑かに違い處に遊んでゐる。この句の佳さは鑑かに違い。 住さによると思ふは結局作者の物い觀方の 住さによると思ふは結局作者の物い觀方の 住さによると思ふい。

情景がうかんできて、かつてありし埃臭ひ日鮎美――父も見も妻も よごれて笑つてる

である住い句ですね。をおもふてしまふ。ほんとうにうなづける句

# 掌にのせて蟲のいのちのいごしまれ

寫したものはごんなにうまく 云つてあつてにしかも强く出てゐる句を愛する。理智で描面二――かういつた風な 作者の心の正直祭 二

**鮎美――蟲に生きてゐる 作者のこゝろがも途に詩ではないと思ふ。** 

山雨樓――女流作家にあるやうな やさし 山雨樓――女流作家にあるやうないであなが、この場合 表現効果が多かつたであた方が、この場合 表現効果が多かつたであらう。

# 靴下の穴を忘れた隱し藝

川柳に對する態度を明確に定めて、それからを思ふ。所詮何とか云はうと思へば、自分のを思ふ。所詮何とか云はうと思へば、自分のかとさいると思へばくさゝれる。批評のむつかしさみ路――褒めようと思へばほめられ、くさ

おいと思ふ。 ないと思ふ。 ないと思ふ。

町二 ――昨日の川柳であって、今日の川柳町二 ――昨日の川柳であって、今日の大多數の句は人々に 何の眞賞もあかだがこれは偶々この句が爼上に あげられたがであって この句のみに云ふ言葉ではないがであって この句のみに云ふ言葉ではないのであつて この句のみに云ふ言葉ではないががこれは偶々この句が爼上に あげられたががこれは偶々この句が爼上に あげられたしばせぬ。誠に句唇の名に値するものゝみだしばせね。誠に句唇の名に値するものゝみだしばせね。誠に句唇の名に値するものゝみだしばせぬ。誠に句唇の名に値するものゝみだ

山雨樓――川柳の道を進むにも 階程があいんでゐる小生ら、路耶師の「一句を殘せ」にすんでゐる小生ら、路耶師の「一句を殘せ」にすい。 鮎美 ――「いのちのある句を創れ」にすい

して又陳腐な句境から 新鮮な感覺と鋭い角主が初心者と云ふわけでは決してないが)そことは許されなければならぬ。(あながち句ことだからこの程度の句境を踏んで來るることだからこの程度の句境を踏んで來る

を生む捷徑である。その努力こそ明日の川柳尠くないのである。その努力こそ明日の川柳

明的になり焦點が薄らいでくる。

# 秋の鉢金魚の腮にある疲れ

水車――細かい見付け、夏の観賞魚も秋へいまれられ勝ちとなる。作者によつてこゝにしいまれられ勝ちとなる。作者によつてこゝにしいなれられ勝ちとなる。作者によつてこゝにしいない。

町二――「腮にある疲れ」といふ表現に餘町二――「腮にある疲れ」といる表現の焦點となつてゐる。結局かたこの句の表現の焦點となつてゐる。結局かたこの句の表現の焦點となつてゐる。結局かりに川柳的な臭さを感じる。そしてこれがま

出しもしませうが……町二氏と 同臭を感じことは忘れてゐまずれ、それに冬なれば思ひ鮎美 ―― そうです。秋眞中なぞもう金魚の

ますれる

丹路 ――この句の内容が 大體魅力が少ない。そこに句主の損がある。表現、見付けよい。そこに句主の損がある。表現、見付けよい。そこに句主の損がある。それはこの句が素直ないと云ふのほわかる。それはこの句が素直ないと云ふのほわかる。それはこの句が素直はいと云ふのほわかる。それはこの句が素直ないと云ふのほわかる。それはこの句が素直ないと云ふのほわかる。それはこの句が表面とでや力に或る寓意又は 作為と云つたるしてそれは必ずしも外れた観賞だとは 思はしてそれは必ずしも外れた観賞だとは 思はしてそれは必ずしも外れた観賞だとは 思はしてそれは必ずしも外れた観賞だとは 思はいる

うまさを買ひたい。 ないと思ふ。問題になる句だが僕はこの句のないと思ふ。問題になる句だが僕はこの句の的感情を漂ほしてゐる藝術性も 亦否定出來しかしそこに功緻な技法を以つて,可憐な美

# 蚊の死骸つまんで外の風へすて

鮎美――デリーケートな慈光をあびるりの手に幸福な骸となれ。

柳に迄醱酵させたのではないだらうか。 中国標本――鮎美君は妙に 蚊の死を讃美しいる魅力があるやうだ。で、この句のごこしめる魅力があるやうだ。で、この句のごこしめる魅力があるやうだ。で、この句のごこしめる魅力があるやうだ。で、この句のごこしめる魅力があるやうだ。で、この句のごこしめる魅力があるやうだ。で、この句のごこしめる魅力があるやうだ。で、まの句のを讃美し山雨樓――鮎美君は妙に 蚊の死を讃美し山雨樓――鮎美君は妙に 蚊の死を讃美し

事もなく丸き茶碗に箸をつけ 十 靜事もなく丸き茶碗に箸をつけ 十 靜事

丹路――「丸き茶碗」と云ふ川柳的表現手 一之は在來の川柳味と 反對に捨てたく はい。句を一貫する内容の川柳味と句語の川 が的扱ひ方から來る川柳味と 反對に捨てたく

水車―― 此の境地は必ずしも 偉としないが、普通な事象にさへ創作衝動を感じられるが、普通な事象にさへ創作衝動を感じられるが、普通な事象にさへ創作衝動を感じられるい。けれ共決して逃避であつてはならない。 付全體からは平和な家庭の晩餐の光景が うつを置からは平和な家庭の晩餐の光景が うかとはれ、しかも「事もなく」と上五で暗示した。

山雨樓――この句も主觀句と 稱せられる が、句の迫力は弱い。 句道の把握が出來 うでなくてもおぼろげな 句境の把握が出來 うでなくてもおぼろげな 句境の把握が出來 うでなくてもおぼろげな 句境の把握が出るが、句の迫力は弱い。

鮎美――諸氏の説につきてゐます。

觀の上に立つもので絕對的な 客觀句といふ句と客觀的な主觀句とがあつて、詩は總で主であるが、同じ主觀句の中にも主觀的な主觀の工土側の本主觀句の中にも主觀的な主觀句

# 憂所四五年程の音がする

ものは存在しない。

とか「音で書」とかの技巧をこらすとこの句とか「音で書」とかの技巧をこらすとこの句とれてゐて、一見平易に言はれてゐる如くみまれてゐて、一見平易に言はれてゐる如くみまれては迫力にとぼしいもいでありますれ。大年れに依つて句も生きるのであるが、この性い句である。一般に、し止め、る止め、の住い句である。一般に、し止め、る止め、の住い句であるでする」が殊にいゝとおもふまなれば何々の音で止めてあるが、このおれば何々の音で止めてあるが、この句を見のがせぬします。

のであらう れしい。 の音響感の懷舊的な情緒を 氣持がこはされてしまふ。この句は或る刹 句主の生活深度がうかいはれて 思ひ浮かべた

い。もつと素直な言ひ方がないか知ら。 といふ作者の生活感情が わからぬのである が、なぜこんな風に云はればならなかつたか ほごこの語が意味するところは 私にも解る 丹路 ― 僕も亦中七には 賛意を表し得な 町二 — 「四五年程の音」がわかられ。なる

だのであらうと思ふ。同じ作者の句に「ママ よ君等の正午なり」がある。 となり化粧の程を考へる」「サイレンが鳴る 所の物音の中、何かの柏子にふと 思ひ浮ん から、今では子の母となって世間の風波に、 のであらう。結婚して隠れ家のやうな愛の単 人生の複雑相に、もまれて來た越し方が、臺 程の音」は一つのかんとして耳朶に響いたも 音に呼吸するものにとつては、この「四五年 の山である。だが日々豪所にあつて其處の物 山雨樓 ――「四五年程の音」は事質この句

#### 曼珠沙華秋 0 女 0 情 熱 ית

川柳塔より

する。血は情熱を思はす。情熱は女の方が男町二――曼珠沙華は赤い。赤いから血に通

より縁 わづかにこの句の存在價値がある。 細工の妙な得るが、「秋の女」としたころに 毒々しい。で「毒婦の情熱か」とすれば寄木 が深い。所で曼珠沙華は赤いと同 時に

――「情熱か」はいやだ。

折角の「秋の

も「よ」でも「や」でもいけない。 きとめてゐない心持が殘る。しかし「さ」で 踏した感じを表はしてゐる。そこにも一つつ らやまし」と一脈似通った氣持が詠まれゐる ますが、これまでに一句を創れぬものです 齣々々ならべられてゐて うま味もなくみへ 生れます 魂はいつもさびしい途を歩んでゐます。餘談 す やうに思ふ。「情熱か」のかは幾分斷定に躊 になりますが小生の雑吟は こんな歩みから られますが、そうではありませぬ。小生の詩 まりに寂びしい悪い結果にもなろうと 考へ もこう言つたものがあります。小生の本心で 女」がぼやけてゐると思ふ。 か、否 こそくと秋か拾ひに出たか留守 山雨樓 — 詩魂とでも申そうか 小生のこゝろのおくそこには、い 僕の舊作「葉雞頭お前の戀がう 曼珠沙華、秋の女、情熱、と一 ーそれはあ 0

的な危險を持つ表現にやゝ躊躇な 感ずるが 町二――「秋を拾ひに」といふ観念的抽象

> 1 やはり全體としての住さな推さいるな 得な

をおもひて微笑れてきます。 がいろ濃くでてゐて、遠隔の地にあつても氏 て初對面の感じ)そう云へば「こそ~~と」 すれ(かつて朝日會館に催されし川柳の夕に ひますが民郎氏に秋はびつたりと きてゐま 出たが留守」もきてゐます。民郎氏の素朴さ 作 者を 擧げて言ふのは如何と思

具象化をはかつてゐる點もいゝ。 てくる。下五を「出たか留守」と巧みに句の に」と云ふ句語には秋色みなぎる天地に憧れ 4. 君を感じる〈東京遊走記の下町娘から思 かもつやうな風懷 く、果敢な身輕さが偲ばれ た點もあるが)それはさておき「秋を拾ひ 山雨樓――僕はまた「こそ~~と」に民郎 C 付

### 故 伊 藤 愚陀追悼句

**銀題「無口」三句** + 故愚陀監督の映畵 蓮 二月七 H 東雲小學校前、玉造終點北ノ筋北入 路 午後六時半 特作を映寫

川柳雜 ]1] 誌社玉造支部 海のダルシニア」

### 賤 L 老 て あ 湯 12

(555)

かつて、餘裕をみせて害れず、「富)。。 養 二= 熱い湯の浴槽の隅の方に、老人がつかつて居る じないので、錢湯に來ても江戸の昔を自慢して、ものであらう。彼等は老いても矍鑠たる者で、少 よう。) 秋の屋=熱湯を好むのは勞働者に多いから、賤深いであらう 等である。 い湯へ小さくなつて入つたのでは、 て、傍人を顰蹙さ、少しも悲哀は感 尚更哀 のんびっつ もし れか

(556) 0 惚 to 顔 見 て

東種省 の情味で、 魚= 現在亭主が浮氣をしてゐるのなら嫉妬からだらうがの情味で、决して嫉妬心からではない。 ニーたとへば、旦那の買つた花魁の顏を見にゆくなどは

東

一寸問題だつた女なら、 女の好奇心から見に行くので

行く序に、それを見るのであらう。
妻が其話を聞いて、どんな女だかみてやらうなどと買物にでも物だといふ程度で、關係が出來たのではなく、所謂一寸惚れで我の屋=「夫の惚れた」とは、あの煙草屋の女房は、素敵な尤 あらう。 結婚前に

(557) 師匠へ の 旅 の 土 産 は 物

ふるの屋=ハ 省 二=師匠へ 秋の屋=ツレ理窟めいた咏み方で、面白からぬ句であるとた。それが師匠への何よりの土産だつたと云ふ意であらう。東 魚= 百聞一見に如かすを如實に、師匠に見せる事が出 心てゐたが。 名物などは 兎も 師匠に見せる事が出 角 見聞談である であると思

(558)Ш 最う嘘 の な い 12 成

魚= 死でしまつたら問題はない。 奇略も奇禍も何に もな

の屋 11 ■ 嘘も誠も一枚になつてしまふのだから。1= 北郎一片の煙で、人の一生が解决される。□遂げたと云ふ誰も同じ眞實が殘るのみだ。

### (559) 王 0 灰 ٤ 聞

灰を吞むで缺落ならば男女の情事である。「聞て」だから、誓紙となしたもの、それを燒いて相互にのみ約を結ぶ。牛熊野の鳥へらすなり」高野山を始め諸所より授け、符印に娘野の鳥へらすなり」高野山を始め諸所より授け、符印に ますと くりし て逃出す方であらう。 re びッ よりり

や逃亡 秋の屋=卑怯武士の所爲と思ふ。
・逃亡するより手はないと、其夜の中に出奔してしまふ。た。誓を破れば血へどを吐いて死ぬと云ふじやないか、こりた。誓を破れば血へどを吐いて死ぬと言はれ、ギャフンと参東 魚= 其場の言ひがかり上、血判でも何でもして誓を立て

#### (560) 女 0 鏡 見 to 迄 7

ふ。これが娘だとさほど崩れもせぬ化粧を入念に直す所なのだ東 魚= 一寸した合ひ間に鏡を見はみたものゝ、直ぐに仕舞一寸鏡でみた丈けで濟むでしまふ。世話女房らしい身だしなみ省 ニ= 有閑夫人でない以上、鏡の前にひツついては居れぬ といふ心持であらう。

けては、 ては、つくん~鏡を看る暇さへ無い。 秋の屋= 三十過ぎて世帶染みる而已でなく、二三人の + を儲

### (561) つて 二度起

秋の屋= 口は禍の門、舌は禍の根。 娘、立ててしまつた。起請のやり直しとは、笑止千萬である。 東 魚= うつかりつまらぬ事を云つた計りに、女の疑心を又

ると云

ふのを掛けたもの

であらう

省 11 然 そんな 事 B 面白 い 0 から 男 女の關 係

### 1 鋷 0

たものと思ふ。氷を出す時期になつて、そろ~~周圍けてあり、家根だけが地上に出てゐたと記憶する。恐 げて穴藏風にし、氷を貯へ上恐らく穴藏式であつたらう。 11 )で、 星祭とかさういふ風な處を撰んで、氷を貯へにし、氷を貯へ上は厚い苫の様なもので、氷を貯へ式であて1 室 はし」と詠んだのだらう。 朝鮮 のもの で私の見たの であ つたか は 凹知 家根がか 82

秋の屋= 昔の氷室は土室の上を、こる、それを「鍬の手廻はし」と詠ん 笹の葉で掩ふも 0 と某

つた。大和耕作繪抄に、氷室の事、土を一丈あっ手傳にいつた。氷室を開く鍬ではないが、木屑な省 ニ= 幼時、大きな氷藏の附近に住むであっ有つたのを、看た事が有る。 厚 くとり 敷て氷を置くに、 きゆる事なし云々。 木屑を除ける鍬はあ まり堀

### F 0 顏 は 中 IJ 先

るの 屋 黒 二 (563)下總松戶 0 圖 は載つて 居 るが。

秋東省 つたであらうが、「雲やり」が何東 魚= 解しかねる。東 魚= 解しかねる。 0 の東岸で、船着場であ 5 るから、 樓 から

### (564)或 顏 は 也 かい 山

競 東山 は 老 魚=「降也」は、涙が顔をぬらしてゐるのと、鏡にはいたつて低い。國替通過の休憩だらうか。いやしぬると」を古川柳は、殆んど踏んで作られいやしぬると」を古川柳は、殆んど踏んで作らればいる。 經ぬ てゐ Щ 12 雨 る る身 から

-( 33 )-

秋の屋= 全く了解に苦しむ。 淚の雨が降るとしても、 夫れが鏡山に關係が 無 いや

#### 物云 は 柄 杓 を 遣 3 水 鏡

られたの をみる方に重きを置きたい。(見るのは女であるは申す迄なし) それが不明で句意を解しかねる。 秋の屋=社寺の手洗盤であらうか、物を云ふ人が何であれたのだ。はつと思つて直に柄杓ヶ遣ふのである。 ニ=家庭の場合である。物いふ人は何人でもよい。 魚 うつかり水鏡 に見入つてゐる處へ、何にか 云ひかけ る敷

### (566)追 分 來 て下戸 を眷 る

して、道路の追分まで來たが、自分の行先が判らぬ故後より來秋の屋=「眷る」は「みかへる」と讀むので、醉漢が疏々疏々と は解ぜられるが疑問である。 なつてゐたが、でもないやうである。「たづねる」などなら句義 ニー下の字が原本、どうも不明。江戸文藝本は「育る」と

見たが判讀出來ぬ る下戸を看返へるのである。 □= 徳川文藝類聚本も「育る」となつてゐる。私も原本を 「眷」ならば眷顧など用ひて、「かへりみる」

然だと思ふが、原本眷にみえぬ事もない。少しく不安。東 魚= 句意からは、上戸の方が先きへ來てしまふのは不自 謂だから、「みかへる」と讀み得る

### 中 の 立 波 か <

立波がひく」は恐らく、 魚= やり手の事を話すのか、やり手が噺をするのか不明二─ 原本「遣り手」 やり手の噂でもしてゐたのならむ。 立騒ぎ打寄せた波のひくやうに静まる やり手が噺をするのか不明

> 處 12 へ、噂の本人がきたので、其噂をした女達が、秋の屋=妓樓の新造などが打寄つて、遣手の噂 遣手の噂話をしてゐる 波の引くやう

立つて行くと云ふのである。

### (568)赤 0 0

原

く聲は、 **秋の屋**=如何に閑散の雲見世でも、 泣かない、小便をしない子を。 ニニ赤ン坊の聲を聞くような、 魚=そのくせ晝店の徒然には、 素見客の耳に快くは感じない。 赤子を借りてくる、 世界ではない。 赤子がおぎやあしくと泣

### 樂屋み t かる 翠 簾 0 正

(569)

てある向きもある。そう解せられぬ事もなく、叉一般的に解し夫人に問題を起すのは少くなくない。 (此句の正客を繪島としだ。特等の客(女)などは、兎角、樂屋をみたかるもの、一手員 特等の客(女)などは、鬼角、樂屋をみたがるもの。一有閑 二= 芝居の棧敷に内翠簾、外翠簾などあ 今日の特等 34 )-

想しても勿論差支へない。 てもよい) 魚=殿女であらう。 繪島ときめずとも宣しい。 繪島 を連

秋の屋=看し玉簾の内ぞゆかしき。

#### (570) 越後屋の 灯 を 供 か か そ る

たらう。 省 ニ=「扶桑第一の大きな吳服店」灯も敷へ盡せ 秋の屋= 魚=大いしたものだと、 実服を買ひにきた、客人のお供である。 大いしたものだと、田舎出のお供が驚いた事だらう ぬ程であ

# 571) あまつて足ら ぬ

省 || 然し「六國も說く氣女房の大晦日」が案外成功する事

9屋 - 過ぎたるは猶及ばざるが魚 = 即ち牛賣り損ふ奴。 だから、一概にも言え

如

# (572)化 る 虫 ò h

ならむ。 む。虫も多く住むで居るならむ。虫賣は捕へに來る事であ 二= 化物屋敷と噂されて居る程なら、草茫々と茂て居る

で捉えてゐるのかも知れぬ。東 魚= 晝間はそれ程恐 秋の屋=異議無し。 = 賽間 つしい 事もない から 商賣物を此處

# (573) いさよいは少しおと り て 小

劣る如く、小紫は高雄に少し劣るといふのである。第二位の小紫を十六夜の月に譬へたもので、十六夜が十五夜に むだが、 **秋の屋** = 三浦屋樓中で第一位の高雄を、十五夜の滿月に譬へと思ふ。小紫はそのかけの色にも思ひよせた氣がする。 二=「泥中の蓮高尾と小紫」で、小紫は親指の次ぎ。 魚=駄勞解を申してみれば、名月の紋日と翌日と二日 流石に十六夜の既は、見劣りがしてみえると云ふのか

# (574)は か りを下戸 の

まれぬのである。 するのに、 本人はくどくしく何度も言傳した事であらう。 るのに、其要點を語るので、長々しい言傳などは、醉漢に賴秋の屋=宴會が了つて一同退散する時、下戸が上戸に言傳を 先へ返つた下戸が、其飲助の家人に傳へるのだらう。 = まだ二次會へ行くといふ尻の長い上戸からの言傳の

ニ=下戸が頼まれるか、頼むかが問題ですね。 「下戸の」

> が頻まれる方であらう。 し方で、どちらにも取れるもいだか、 實際の多くの場合は

東『魚=下戸が醉漢に言傳をするのは、 矢張り上戸に頼むやうに思ふ。 少し不自然に思はれ

# (575)丹誠 に桃を咲 せ τ 追 出 礼

のを、お名殘りに。からぬ事に氣付き、 魚 重年するつもりでゐた女中も、 出代らせる。丹誠した桃を節句に役立した 一寸主人の方で面白

奉公が書餅になったのである。 秋の屋=「桃栗三年柿八年」とい ふ俗諺があるから、

ニ=ぼんやりした作だ。 前句により判明するなら

# 576) 美 娘 0 供 0 区 IJ

返るなどは俗無だが。 11=この供は無邪氣で罪がない。美しい女房の亭主が反

く附いて出る。 秋の屋=獣舞伎劇の美しい娘の供には、 魚= 同じ供をしても、主人が人三化七では片身が 繻子奴といふのがよ 50

### (577)枝 かい 6 ت ほ す 琴 0 似 せ

そめけん」。「松の音を琴の調ぶる秋風は、瀧の糸をやすげて彈 崎松をよむだもの。「似せ物」ゆる句もつまらない。 くらん」など、多くよまる。「琴の音は景色の外の隱し藝」は = [ 零の音に峰の松風通ふらし、い づれの をより調

くすぐり氣味である。 秋の屋=「零の偽物」は甚面白から

東魚=松風を零の似せ物と云つた丈けが奇智的興味。

チト

**-**( 35 )-

(578)娘 は 行 t か ij

にする。二 ニ=「娘の意地を立る負公事」( (AE) 斯る葛藤はよく 耳

秋の屋= 魚= 小説的材料をうまく云ひ表してゐる。3。姉の意氣地をみよ。 「勝公事」としても、 又聞える句であると思ふ。 面白い。

# (579)立並ふ木々と は ī す 松 の 風

足る。 つた心持。 ニー木々に立並ぶとも、 魚 外の木も一所に立並んでゐるのだが、 松風が吹通つてくるので、 外の木を多少哀れに思 其處からくる 言ひ

秋の屋 三十一文字の材料にならぬ。 松の風は歌にも咏まれるが、 榛の木の 風や槻の風

# (580) うこんかさめ て 井 手 の 夏 ]]]

の花の、 は夏川の風趣となる。 二 = 春深み井手の川波立ちかへり、見てこそゆ うこんで、「水迄も青色にみえる井手の里」が、さめて かめ山吹

なつて來たと云ふのであらう。 た井手の里の流れも夏が來た。 の屋= 魚=山吹か散るなり映るなりして、 六玉川 の一の、 井手の玉川である。 あたりの緑の方がうつるやうに うこん色を呈してゐ

# 振 袖 I 0) 氣 を 行

の時代とは、全く隔世の感が深い。 東 魚 = これらが代表的の美人にされたのだ。 1=「勞咳は大振袖の病なり」。 年頃の娘の患。 今の健康第一

> て行くといふので、「振袖」は病者のでないと思ふ。 の屋=大名などの腰元が、薬湯を盆に載せて、 此れを病者 それを捧げ

が、 東 魚= 煎し上つた薬土瓶を、自らわが部屋へ持つてゆくの振袖とすると、坐五の「曳て行」くの解釋が出來ぬ。 細々とあはれに想像されたのであるが、「腰元」の場合にも

解せられはする。

(582)寒 噂 E 赤 < 成 华

人と解するもよろしからむ。 着てほんの眼が覺」等をよむで、此句に及ぶもよし。或は又、旅 ||=(334) 「あみ笠の赤く成時おもひ知」。(402) 「編笠を

秋の屋= 三界無安の巡國の修行者が被る、東 魚= 同感。 菅笠ででもあらう

## (583)度 の 硯 文 ات Ś さ わ

視は色氣がないと云ふのかと思ふ。 東 魚=今戸でないかと想像する。 あた事があるのではないか<br />
) 東 魚=今戸でない。 (度は渡だから昔此字を用 つまり文をかくのに、 瓦

省 二=イマドですか。今土と書いたのはある。實物を看ると案に相違の粗品だといふのである。此句のは今戸の瓦硯で、文書で看ると風流らしい名 陶器匠ありて是を産業とする家多し世に今土燒と稱す」(江戸名 秋の屋=江戸の今戸を「今度、今渡」などゝ書く例は無いが、 文書で看ると風流らしい名であるが、 「此邊甄者

所圖會)

584) ニ=岸をはなれて遠方へ出てゆくの 女 0 望 岸 を 漕 せ 女は嫌がるもの る

す

るも女の氣一柳だる 一女房の願ひ岸を漕く舟」(不斷櫻)。「岸はかり漕かせたが

ら遠くなるのを恐しがるのも。流石に女である。東 魚=質際は岸に近すぎると揺れのひどい\* 秋の屋=東京近郊の遊園の池で、 貸ボートに女房を乘せて、 8 0 だが、 陸か

## (585)遊 行 の 供 の P か 利 過

それを漕いでゐる良人がある。

主人の事をあんまり喋々しすぎる。 魚= 風體もかまはぬ、えらがらない遊行上人の供にして

均がとれる。 秋の屋=默然としてゐる主人、多辯の役者、それで巧みに平

十世と續いてゐる。 ニ=遊行上人は、 かなり詠まれて有る。藤澤の寺では何

# (586) 喰切て驚れぬ る とう

みたら、 秋の深くなつたのを痛感したと云ふのかと思ふ。 魚=「風の音にぞ驚かれぬる」に基て、唐辛子を喰切つて 充實した味になつてゐる、中々の辛さだと驚くと同時

たのでは無く、只蕃椒の辛辣を感じると解釋するが宜からう。 秋の屋=歌は立秋の歌であるから、 秋の深くなつたのを感じ

ならないが、單に良薬を活用したとならば、唐からしの味の方東 魚=歌の意に重きを置けば、秋立つ氣分にとらなければ 二=朝鮮在住の私には、此經驗は度々ある。 から秋やゝ深まさると取つても差支へないと思ふが如何であら

# 春 0 あ さ ち 0 食 粒 を

ニーアサチは朝のお勤め(讀經)。

飯粒(お佛飯へのこぼ

る。 れであらう)をふむ。 「朝ぢからもどり大根の菰をとり」がある。 お有難屋の家庭では、 かなりな事柄であ

ほ春淺い感がする。 魚=「食粒を踏」で足袋をぬいでゐるやうに思はれる。 倘

秋の屋=私は早春の感じが不足だと思ふ。

# 後家は嫌いと 後 家 が せ る

(588)

涯を嘆じたのであらう。就て第二の後家が世間から同視されのをいやがつて、 魚=ある後家が一寸面白からぬ噂をたてられる。それに二=後家同志、相通する筈。 自らの境

者紀逸が最好む所である。 秋の屋=後家といふ語が二つ有るが、 斯 る重語體の句 は、 選

## (589)五 の曉 ま た ぬ Ħ 間

に渡し、遂に分散するといふのである。 いふのに、まだ其曉にも到らずして、五間口の大店を他人の手 省ニ=さてネ、五間口を?印にして熟考せむ。 秋の屋=世間の多くの放蕩息子は、「廿五の曉に目が覺る」東 魚=解らぬ「五間口」が不安だから駄勞解を控へる。

# b 出 る

(590)

秋の屋=如何にもさう云はれると「五間口」が少し不安である

は疲れ乍らも、樂しい心持がある。馬にもさうした氣配が窺は東 魚=仕事に出る時には、流石に緊張してゐる。戾る時に れると云ふのであらう。

秋の屋= 二=然らむ。 現代のサラリー 7 とも、 叉此駄馬に等しと云ふ可

結 戀 新 湯 利 を 治 息 局 宿 1= 3 ば は 塲 ŀ. 新宿より中央線を經て 0) から 0 女 え か> 諏 驛 ボ 3 0 b す 訪 ス 旅 見 8 3 12 1 溫 合 12 0 人 あ 0 泉 ば 0 かっ ば 生 À H か 3 ٤ 金 b 30

用

から

あ

h

燕

から

通

切

車

4: B

殺

15 持

3 5

客

魚がし 錦 繪 0 0) 樣

東 文 な 字 京 お 12 雜 8 4. 馴 感 染 (三句) h む 12 か 3 ٤

b

壽

U 7

思

朝

田

新

水

骨米



柳

蛇 彼 イ凝りの借 F. イ 0 0 ッ ブ 55 げ 雕 柄 女 11 ラ 寒 ٤ 塘 多 F 出 0 唯 貸 A 3 0 0 T ٤ 霜 3

見

h

茶 3

街

懷 心

家 r

0

父

2

3 3 落 し 5 女 3 な T 付 あ バ 出 給 13 1 3 15 0 3 1 寒 待 會 嘘 女 2 3 1= T 菊 S 先 將 3 ま 多 T 1-0 熟 聞 75 麻 7= 哀 古 は 8 か> 純 す 3 4 か 純 n せ 田 生 ٤ b T 踏 呶 な 喫 切 1: る 3 け 葭 水

茶

3 h 選

路

塔

郎

75

旅 h

月 宫 獨 ٤ 城 0 h \$ 0 宴 來 す 小 廣 3 n 3 3 京 月 ば < は 情 雲 な 佗 1: 流 8 b 7 3 n (三句) な し T かっ 月 0 埒 h 18 ٤ あ V 見 な か b 3 h す・

は 木 2 呼 1 ば 應 路 3 水 0 色

紺

Ŧ

パ

娘

心

0

白

足

袋

op

對

岸

B

11

2

1

1=

乘

n

ば

見

物

か

٤

問

は

n

諏

訪

湖

H 亂 耽

住

£

0

b \$

0 非

0

2

8

鉢 0

> Ξ あ 常

鉢 ٤

貨

2

T か 2

10 5

< CK げ

服街

何

事

時 Ξ T ば

٤

1,

逃

言

薬

朝 働

カン 4.

3 T

晚 お

ま

3

イ 望

1

3

۴ ٤

ッ

1

1

ナ

n 邊

^ 况

3

母

信

U

九

3

年

展

身

近 食

(三句)

魚 菊

屋

荷

0

水

黑

畵

淡

彩 私 7=

畵

退 51 幸 滋 職 慕 釣 せ 金 0 15 0 P < T 生 T 建 5 活 來 0 12 す T 茶 ٤ 設 慕 は 計 < 碗 女 n から B 房 T H to D> 來 3 V 邪 魔 T 菊 T から 花 あ 3 5

はにか 借 氣 北 パ 胃 秋 花 宿 張 to ンの から 風 0 h re 嫁 題 學 か 5 あ から 乾 病 朝 3 0 は 0 良 L P n 0 h 晴 涿 出 あ で な 12 1: から 酒 似 12 n 2 3 誰 re 事 事 秋 づ から T から \$ 盜 0 5 < 學 7= 否 賀 散 纠 知 \$ 散 3 な ば 生 顏 狀 n 0 + 步 す 髪 窓 を か 0 C 多 1. ば T 1= 書 ほ 3 西 敎 月 關 連 屋 矢の 5 身 楊 牌 3 5 0) n 張 え 0 光 丸 車 を 田 2 本 から 8 髷 7= 出 で 匂 彩 打 B > な 醉 吹 雅 3 h す よ 3 b 壇 + 75 ひよ 3 3 樂 南 图

意 親 娘 泥 緊 身 E ほ 酒 璺 只 >紅 子 Ξ 廿 U 8 0 氣 水 張 1 星 金 込 ル 更 12 0 to 四 ^ re 12 T 玉 東 車 萬 3 今 5 瓶 いり 腰 n 0 解 4 來 言 日 \$ あ ぢ B T 五. < 掛 7= ф た \$ T 1 同 商 行 は 年 0 13 京 JL. 0 V V 1= V す 7= 迎 女 1: な 賣 5 3 1: 0 老 氣 ば T 形 0 胎 戀 0 に せ b: H な な 忘 を ٤ な 話 肪 飯 3 本 5 n は 3 8 0 椅 か> 4. 打 0 酌 7= 8 阿 いり 人 かゝ 5 生 か 1= 子 0 ほ 1= 額 0 丸 女 + 吸 re あ 0 15 田 5 ŧ 3 3 C け T b 殼 3 否 笑 湰 3 な h 閑 翠 居 2 U 月 よ n b U 3 3 h 生 夢

圍 子 碁 8

負 段 3 人 T 通 0 かず 誇 3 男 銮 0

1=

1

な U

帽 3 から 3 か 無

春 秋

喜

多

斷

髪

0

あ

n

E

果

敢

4

持

な

子 岩

物

物

٤ <

T

櫓

0 "

3

む

P

け

3

2

で

彈

は

ワ

ル

0

秋

空

r

盟 思

12

見

0

8

下

靜

路

+ 月二十 九日龍 田から法隆

テッ 0 彼 牛 岸 から 今 ٤ 年 7. か 0 82 夏 柿 は 1= 疲 子 E n 連 7= n b T

秋

ス

戎 機 曉

橋 關

越 車

後

TS

£ 12

b 3

T

呼

12

お

h

な

春 元 紀 太

姉 巫 者

雨

Ŧī.

六

人

何

5

12

8

な

3

D

を

寄

せ

橋 顏

本

蹄

٤

8

12

に

行

0

晋 B

1

な

5 街

かい

3

え

12 3

月 IE. 去 年 か 給 h 寄 ち + 百 3 3 b 0 位 4 圓 0 は 忠 動 屋 8 犬ぶ 知 情 1 から 1 5 論 な 0 b 等 h 0 た 12 0 0 顏 ぼ \$ 尾 負 U h 0 dı 多 T か 今 3 風 電 す。 2 3 副 車 7: な 0 n 主 1= 5 T b る 3 任 V

H 屋 0 妇 粉 手 何 0 子 35 帳 8 梯 1= 藥 b to 子 左 寒 25 7= 0 8 殘 3 向 F 業 か か 子 3 3 1 12 事 な 右 子 せ せ 12 ٤ から 向 5 ŧ 思 歸 か な n b 0 h 3 h

水

藥

を

B

人

0

俺

12

今

夜

B

5

n

3

西 叱

村

明

珠

猪秋氷

色 は 7=

笑

腕

力 口 0 屋 2

B 0

£ は 13 0 ٤ 起 3 U T T 3 母 7= 0 0 萬 詠 か 51 1 < 僧 値 鼻 to re 訊 吸 15 ね

浦 卢 瓣 觀 月 餘

0 氣 分 1= 觸 3 5 桂

人

貫

苦 儲 13 ま 否 13 V 事 大 酒 1= 1= h 和 13 事 辛 から 盃 平 1= 抱 お原 不 3 3 し秋 也 n せ 妹 つば Ł T 5 尾 V 3 す る n 3 T 3 3 T 濱

花 見 松江 据 か 支部 1 デ 5 え ンに 周 久 T 年 部

柊 峠

20 0

念

廣

江

天

痴

人

0 0 茜草女松操專攻 外 處 は 女 滿 10 科へ 雇は n 開 から 友 入學 0 れて 0 サ ょ 1= 67 菊 1 疲 12 ぼ n 來 h 11 去 73 す 12

空 戎

腹

0

٤

T

\$

儲

V

箸

0

晋 1

商

談

から

長

3

帳

塲

で

妓 市

٤

仲 没

居 食 3

塲

子

橋

月

30

眺

也

3

٤

T

15

儲 腰 舊 日 植 よ 唇

カン 辨 友 曜 木 2

5 當

D

人 言

ば 2

0

b 3

12 n

T を

3 ち

中 會 3

澤

濁

水

制

服

0

當

T カン

菜

持 來

溫

室

飲 妹 3 0 連 無 n 口 ٤ ٤ 言 2 妻 0 0 で 氣 妻 も ٤ 子 合 É は 嫌 2 す

褓 0 子 田賴基君屋島丸にて遭難 殘 し 思 7 8 よ 3 82

旅

非

常

時

0

晋

絕

10

3

な

L

进

船

所

姬

夕

鐘

襁

ひとり あ Ti T か ナニ 1= ば 柘 -榴 0 は 影 熟 0 す あ 水 3 茶 谷 夜 3 か> 鮎 な 0 美

陽

0

む 5 3 中 3 山 0 雲 寺 0 治 額 V] あ h

中

111

寺

母 =

親 0 1= ほ 2 op 子 竹 0 1= ほ 2

H

向

ぼ

2

東京にて十三年

ぶりの友と含して

內 機 見 女

意

秋

谷 ナニ 金

乏 3 で

は 0 0 ٢ 2 b ぼ 3 か 3 h 3 13 > > 驛 方 朝 ٤ B ^ な わ 氣 須 3 から b 12 T £ 峪 出 V 3 D 3 n b

片 仁 現

袖 丹 實

残 Z ス

月 カ

1-1

字 B

0

財 0

布

re

覗 追

か

n

7= 3

> 3 0

な 嘘

0

× >

3

な

b

切

淋

U

4.

お あ 兒

3

か

h L 0

0

包 髭 カン

7 12 h

す 石

3 鹼 0

兒 す T

にしたわ

7=

U b 日

V

舟

那

あ

٤

10

0

か

W

東京句會行か見送りて

岐 阜. あ 1= b 走 0 T 3 20 ٤

靴

多

脫

3

楓

E 徹 境 な 12 か> 男 > 去 b b b 8 10 な < < 影 月 首 3 缺 藤 CK V 竹 U 3

吉 野 11 1= 7

な び n \$ は Ŧī. -7 2 B 甘 七 2 受 3 U 禁 獵 T の鮎 U おど ま 2 3

紙 治 河 E

見 2 0 治 兵 衛 0 肩 を 河 す ~ 合 3 な h

1: 事 物 冒 r 馴 知 は n 5 す T D お 久 家 A 生 4 0 指 n 葉 0 7= 先 服 U

平 茶 岩 口

郎

紫

石

目錄		更生	アパー		弟の	コス		兩親		客ち			後れ	いゝ		借金	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	空想	
に零もあ		の エ	トにコス		様だと	モスへ思		をにくむ	. (	Ø	平家		馳せの詑	伜がある		は別だ	居氣儘な	の儚なき	
るな		場 門 海	モス		酒を	心ひは同		と 言	12 0	家り	物語		びが	を言		男の	氣性	咽喉	
り 彈 か	売	衛だい	だけの	中	つい	世ピニ	清	ひし女	Ċ	人。虱	M		間拔	ひ足し	石	ヱネ	拔け	が乾	熊
なな	井英	け残	庭があ	島	てく	人に	水	ربا ج	, T.		井	þ		醉ふも	曾根	ルギ	切ら	き切	谷
b	賀	b	b	鐵	n	τ	友	し	30	Ż	馬		よ	父	民	1	ず	b	
	夫			洲			帆				領	į			郎				紅
			T.I.		· eri	615		Vers	lar						59	771.	£11a		-44-
ハル			秋晴		面會	雪ち		親の				多の	もう冬			君あ	借金		落ち
ピン	ハル		の今		の 兄	5		幸手	計留			夜空	だな		. 0	れを	のあ		ぶ れ て
でヱ	ピン		日信		妹でせ	面會		土産ポ	居			の細き	あ水吞		2	貰ろう	ればあ		今は
を笑	にて		貴		5	室		ンと	腹を			烟	行みな			てや	ると		金齒
S.		Seri	山	estre	ね	0	*eh:	置	知	ш		突	から	L		n	T	nte.	0
の中		江戶	の	宮	と	すり	渡	いて	5	片		我	ら星	松下		と無	ね	奥	光
で消し		アみつ	君と僕	岡白	言はれ	り硝子	邊曉	て脱っ	なり	上銷		に似て	を見る	小切柳	. i	告作	もせ	野秃	るだけ
		る		峰			童			石	i			子				Щ	

來る所以は、 ることゝ思ふ。この噂のよって 明しなくとも。よく判 兩方が含まれてゐる事は私が説 中には、良い意味と悪い意味と つた。この學生肌といふ言葉の だといふのが 「川柳雜誌」 主幹路郎氏のすべ 東京柳壇 0 中 ハつて貰へ 立ての噂だいは學生肌

つちみち得る所は一つだとしたら、自分の思る商人肌では出來ない藝なのである。だが何 だけに、徳な人生であるかも知れない。要は 會を贏ち得てしまつた。相手方意響を忖度す たが、川柳雑誌社的な情熱はたうとあの盛 がむしやらな進出ぶりではらは らさせられ さもあらばあれ、こんごの らはれたすべてから受ける感じなのである。 ゐることも忘れられない。 たゝそれに徹するだけの熱と 力がなければ ふ通りにやつてのけるのも、氣般の要らない らないといふことになる。そしてその半面 ある謙譲さが尤 も重大な役割をつとめて てからと「川柳雑誌」の誌上にあ 東京句會だって

> 3 0 0: である。恰度それは一つの人生哲學を教へ 如くに …… ・……

> > そんな筈はないのにやつばり 赭顔と紺サー

なのだ 第一印象といふものが恐ろしいと

3

内流の解釋と承知されたい。 は印象を描いてみょう。敬稱を廢したのは松 生き方をしてゐると言ふ意味なのである。で そんな意味ではなくて、やつばり私達と同じ をすると、神様のやうに思つて居たようだが 酒も飲めば、女の話もすると、斯んな言ひ方 の存在ではない。冗談も言へば、 誌社の人達も個々に切り離すと、私達 さて人生哲學の一つを示しに 水た 酒落も言ひ JI 上と別箇

ほと U れ喞 る川柳と討死なする覺悟なのも常に 病弱を だから惱みにはならないであうう。惠まれざ らへて仕舞ふが、それがまた魅力ともなるの に神經質的な半面は、味方な得ながら敵も作 たる器を把握してゐるのである。そして友情 座談に講演に、焼きつくさればやまの情熱を れば一軍に將たることは爲し得ない。筆に る時代の近からんことを この人のために つてゐるだけに痛々しい。川柳作家が惠ま ばしらせるのが大きな魅力だ。そこに將 人を惹きつける魅力を有たな

塚

越

洣

ら午待十一時四十八分頃 十月十五日の午後六時か てゐる。 までを思ひ出して見たが 服が私の網膜に残つ 赭顔と紺サー そこでもう一度 顔と紺サー

らればならない。 は増進しないのである。曾て〇丸が「きやり である。でなけれは川柳雑誌社の事務的能率 の社資だッた如く「川柳雑誌」の社資であ 無産派の市議にならないで關 -(

東

緑雨―克明―紺サーヤは 不可分なものなの 唐突な 出現である克明に呆れるであらうが

雨は克明なのだと言つたら 讀者諸君はこの いふことをつく~一感じてしまつた。然く終

してゐるところに愛すべき 稚氣を藏してゐ 派市議たらしめたのでもあらうが、一面關東 が、さういつた感じに壓される。 葉のはしから闘志が發散される 譯ではない 仕 るのも好意がもてる。市議なんていそがしい の靈塲成田山へ参詣するといふ 信仰心を有 るに違ひない。相對して話し合つても別に言 事から解放させて川柳に精進させて 見た 煮のおつさんで居たつて 闘志に滿ちてぬ 萬よし それが無産

く高踏的であるのに引かへて、言葉から受け 雨 樓 文章から受ける感じは恐ろし

そのごちらなも私達に示して臭れた

作らへて置いたのかも知れない。 なものつて言ふ諺はこの人のために 古人が 態度に接するからである。人は見かけによら 現であるにも拘はらず、ひごく慇懃な言葉と は何かそぐはない感じに襲はれるに 遠ひな物ごしで話す彼氏と相對すとき、きつと諸君 。何故なら彼氏の風丰はその文章と同じ 感じは凡そそれ とは對蹠的である 違ひな

\$ 警鐘となるであらう。運送業をしてゐるとい てゐる音數律が完成したら、自由律論者への る…… 私が運送業からヤヤアナリストのせ やり十二月號を讀んだ 諸吾にははつきり判 めた彼の手腕でもうかゃへる…… これはき るのは、私をして餘儀なくこの一文を草さし 3. と何處か老成してゐる考へ方にび せられた。東念寺で交ほした柳談にも彼 ねなかつた私は、がつちりしてゐる彼の風来 がザヤアナリストとして 才能を有つてる 一識を改めさせるものがあつた。目下研究し 合せだと思つてゐる。 いへ飛び込んだ 金ポタンの制服をしか と思ひ合はせて、妙な廻 つくりさ 猫い 100

てもらひたい。恰度番傘に八公があつたやう もらひたい。願はくば書くものもそれで通 が、この人だけは物やはらか關西辯で通して で東京辯のすつきりして居ることを れて「女は關西の言葉、男は關東の言葉がい こなざといゝ氣になりて喋つたものだつた ……きつとよきものが得られる風に違い ほる 私が大阪に居た頃、 酒席 褒めら 75 L 2

居たやうだつた。聞かまほしきはその感想で 違ない。さう言へば歸る時分には可成疲れて 行くまいが、可成廣範に亘つて歸阪したに相 から、所謂ダークサイドを隅から隅までとは 敷もいちばん多かつた。東道役は玄六たつた ばん最後まで、市 京に居たので、 達 の知 てる範園 顔を合せた ではいち

郎が歸りの自動車の中で褒めて居たつけ。 介の時滿堂をあつと言はせた名文句は、三太 向 島大和田の懇親會で自己招

> 彼女としては地味な存在が して貰ひたかつた。然しフラッパ振りのな かも知れない。 史の身代りとしても、もつと華かな存在を示 へ一句拔けただけだったのは惜しい。葭乃女 たがあまりの多人數に氣壓されてか、宿題 見女 東京句會唯 一人の閨 適當してゐるの 秀作家だ

この柳友の横顔の筆を措かう。 印象稀薄なので失禮させて 貰ふことにして 太、春光の諸君があつたのだが、 この他新水、水 車、夢裡 民 あまりに 郎、

# 猫 丸さんのことども

れた。 ら賞狀並に銀幾枚かた與へら 子女の模範として時の役所か 讀賣で江戸市中で吹聽されい て、當時の新聞である瓦版の 頃非常に親思ひの孝行者とし と云ひ江戸の生れで、十才の 丸さんは本名を阪野まん

で有名以大島圭介や其他知名 上愛嬌があつたので全權公使 唄や三味線もうまかつた。 の方に愛され、扇面、舞扇等 子供の時から舞が上手で、 其 1-の鳩が時を違へすその門先へ をまいてやつた爲め、

數百羽

引越したなれば家に猫が

下村猫丸さんについて、その兼嗣子阪野秀男氏から、米村あん馬氏去る十一月一日、八十一才の高壽で長逝された松江柳界の代表女性 を介えて思び用語を寄せられた、その一端を紹介して同女を偲びた

50 鳩を愛し、 もゐて、猫の育兒院のやうだ て夫婦共稼ぎで理想通り資本 と笑はれたこともあつた。 染筆ル澤山貰つたさうである を得て置屋業を始めた。 した。夜は遊藝の師匠をし り松風煎餅を賣出し好評を 猫な愛したのは其の時分か 其後夫重吉氏と共に松江に 一時多い時には三十疋 毎朝夕門前に米婆 叉 せた人も 資を與へて之を救ひ、 み困難してゐる人を見れば物 みならず、人知れす陰徳を積 をはなさなかつた。 は狂歌かよくし、時代に應じ 集つて、 つてゐたさうである。 、川柳を始め、 猫丸さんは動物な愛したの 古らくから笠付い 與へられる米婆 尠くなかつた。 死するまで筆 俳句、 成功さ を待

卷ずし 卒業の fili 歸るなり晴衣を 花嫁を覗け 晴衣裳遠くなるまで いた を貸す晴 ル してな晴衣も の空澄んで晴衣 呼ぶ聲に晴衣は 何 て冷めたきダイ と晴衣は一 を提げて晴衣は歸 虚で晴衣は 姉に晴衣が た晴 0 衣 晴衣姿をから ば 晴 衣 中 母に氣 晴 脫 0 度よび 子供 寸つままれ ぐも女 衣 夜 ふり 見 着 ٤ ヤを恐れ 襟 30 來 轉 1= 送 かはれ るなり もどし ぶなり か> 石 13 5 衣 3 更 ~ b > h n 3 所 h b h 天 白 青 九某鴉山菊 泊正 氷 答 1. わを 総 兒 天人夫月路馬 童甫炭 羽子 義理 部 晴衣 寶 兩 晴衣着て前も後も見ても 晴衣から又欲しく は 丰 婚 ば 石 袖をたらし 屋 でに行く 板を持つと晴衣がよく似ま ンド 着た時は かり も氣輕に賣 中 0 高 鱪 を明 晴衣 天 地 の晴衣へ次は父を連 へ立つて晴衣の るく 晴衣の重さふと感じ 橋 木 晴衣 風 晴衣の帶を締 つて戀に 1 か (1) カ 73 から 雅 チ 1 戲 ほ 3 フ 1 長 をたる E 3 生 n 福 わをいし " 幽 3 袢 7 11 3 8 n 選 たけ 錦 新 春 明

炭 素 3 選 しとし 白 喜 蝶 H 日▼寶十十あに▼ は福寺 等町四ノ一九 (共) では、 大阪市東區内久二軒町春元方芝四葉君は 大阪市東區内久東寺町三丁目五一次特許事務所、近藤いさむ君は大阪市東區で美君は 大阪市東區内久資寺町三丁目五の美君は 大阪市東區内久資寺町三丁目五の美君は 大阪市東區内久資寺町三丁目五の美君人として左記の三 君入社されること 二次やな新 和田四町野許君は山雨の一大美君は 日へ公用で出る機君は十月世

2

サリ

は指のダイヤに気をいられ

誠

郎

運

よく

ば金剛石と

な

3

出張されました。

#

24 Ħ. ishinocho BB 緑

議員とご しまし 議案中主要な た。編 稱し、 列同

山波踏

東入右側日本橋倶樂部に於て 開催すれることになりました。舎場が變更されまして決定しました。舎場が變更されましれることになりました。舎場の選更されました。 ▼本社京阪神支部聯合 しました。会塲が變更されましたので側日本橋俱樂部に於て 開催すること大阪市南區日本橋一丁目交叉點北辻京阪神支部縣合句舎を 十二月三日夜 編輯局は理事たることを要することで、舊同人を理事と稱することに致に、舊同人を理事と稱することに致申主要なるものは 從 來の社友制か申主要なるものは 從 來の社友制か るこ

石秋

裔

n

避

to

水

たに が明ま

-( 46 )-

H ij 寶 置 萱 " 石 石 1 石 石 1 17 禮 石 0 1 8 0 % から 2 持 1 B 屋 0 から t 0 石 屋 3> 2 は ヤ ۴ 指 ۴ 欲 1 心 0 12 别 取 あ 子 1 賣 傲 5 1 欲 ŧ Ŀ 1 0 まりに る " 0 T h D: = 輪 30 U U A 0 n 12 3 フ F 寶石 脈き 寶 心にな 冷 3 は 寶 1, Il: F 2 1, Ŀ 話 寄 テ 3 !! 1 h やう 石 t 0 顏 1= 1 見 か> 石 だて した せ 虚 歷 迷 石 E 5 12 寶 0 ね 點 燦 な T 12 T 弱 ~ 2 榮 re せ 多 だる 持ち 37. H ま 見 ٤ 桃 石 る 3 T 12 サ 0 を言ひ > 遠 歪 3 b 0 0 あ 1 光 14 5 フ 込 か T は 4. 1 口 光 と言語出 遊 誕 出 說 秋 ワし 3 + 女 3 0 女 U 運 心 11: 見 T 石 3 から 3 3 びなな こまり え 1 ... い 3 10 な £ 4: n 13 T 見 な む 勝 T 82 3 h 3 h n ち 3 h る ねり 3 ヤの H T h b 8 V 清秃 貴代志 南隅人 九文錢 錦城子 良之佑 輝夢市笛 紅 え 某 E 紫 曉 4. 吉 貧愚末柳 左右 の助 30 甫陽 親遊坊秀 川人泰山 堂廣夢雄樓

寶石 寶寶 か 寶 寶 寶 寶 寶 寶 寶石 寶石 さら 寶 ル 反 石 寶 あ 抗 1= 石 石 ラ 石 1 石 石 石 石 か 石石 石 石 3 石 頭 多 ~ 8 は 0 h 面 0 0 0 を ^ 0 0 屋 女ら 手 指 結 冷 淋 H 線 な 觸 送 ~ 双 0 虚 値 値 は £ きいが 手に 勢冷 1 n か ٤ 0 15 0 婚 8 指 か と水 藚 ٤ Ä H る今夜 四十女 ただけ 5 しさ 輪 3 3 月給 + ğ 1= 石 T 6 世 性 冷 戀 め話 から 1 8 1 1 < 多 過 晶 2 \$ T J 光 から + 念 光 見 8 + ヤ to 見 80 re 去 1= から 劇 T 0 A ぐら から 0 ナニ 0 0 0 to 野 石 るまで 1 1: 13 割 珠 1 失 8 3 は 光 涌 笑 8 暮 數 瞳 3 对 + 0 + ts 1 未 2 视 12 2 1= から 錢 h 2 3 12 進 0 1 T 0 T to 金 あかられ くら 見 + てく を秘 7 x x 12 3 3 0 b b あ亡 1: な < 遊 展 な B 直 3 見 か 2 b 3 す 4 b 秋 え n n せ 義機風見 灰寒 芳春利團詩錦四青 Ħ 7= 市 水珠路子女 天雅街 三草岸峰生子郎石葉兒茶汀路郎光 を前

▼席山ら柳▼れ世費會▼さ B▼れ▼れ▼月▼申れ▼さた海訪▼し井定日▼む▼ て渡れる 登同歸江學日 のれ竹た そ 美君阪戸げ野 う白ら内を美君阪戸げ野 で帆れ機う坊はさみら率 すに歸見で君十れつれ水 樂催主坊 7: 川員 ご君は の月まるま君 2 水府 君 君さ 7 す 良途女 柳是 同 川 さ催句 は はれは い須さ Æ 緑磨へまで足を延める人は 十一月五 電ま更話し生 柳 れで集 作 崎 ん十 たはた 人、没食子のきれました、本社が 電 か HILL 十精 柳 社 話 守た。 周 2 -中日 阪 初 お喜 話 H 初めた頃、秀君は、 命月 訪れル 一月十日でお喜び申りた。 でみな 頒 日進 市西區 关 東 會費二十 四名されました 布 人和の多武峰へなつて 歸阪さで足を延ばさ 七 祝賀 年 6 ٣ Hi. 口主 Ti. 部巴 3 二十 れン 頃まで十 會 舎宛に 口十五圓( Hi. 念 てへ 諸か日君ら午 祭記念句 ¿ -Ŧî. 快旅 0: 番 句 題月 番 た 會 たた 談 して三 と路後大 加 3 戶 ま華 n 70 私郎六大 開 開 お儲 8 n 0 燭 T 會 が先時阪 放日 通 通 + 喜け まし 姉 0 加 U 5 出生か川 送夜 3 内な 典 3 勝

光るも 微みの逃を 光 辭 ひを T T を言ひ すばに つてる 笑み のさ 8 さ覗 通お b され n 82 0 する 3 曉美菊鵜同一同今同朝同 津 童女路天 笑 定寶 歲寶 銀金寶 + 石 フ 少石 座 石 0 17 8 0 5 5 ひと摑拙 遲話 1 か 誓 を石 とな 3 n t 文 金 0 (排ひ まされ すに 弯 持ちけ J 0 色 1 0 石 Ä + T E に値引き 智 レングラ に聞 1 てる若さ とけてる秋 見 0 身 3 + せ をば 光 1= 1 りす 7 な 10 か の空 b 3 n 3 b b h < 4

寶寶

は夏

あの

夜

まり

か見魅

石約イ石石屋をヤをの

の値くとる惑面光段手間にも目

^ ば淋

ij

は屋

夜お説

の値く

73 12

V

0 1

つ世 + e

h

とな

女工 寶

電石 屋 電子 電子 電子 電子 屋 を見まれる。

眞ヤ

E 屋ガ

をとりの

て頭ゆ

下る

でイ

イ笑ヤ

2

寶模石造 1= とり ぽつち 0 身を飾り 同雅 医

文部聯合句會を恒例に依り競問で、この句會に限り兼照及席題のと 一番されぬ方も誘合はせてや 一番されぬ方も誘合はせてや 會に 40 づした 四二四)大阪市南區日本橋一丁目交叉點北江東三午後六時半二の天地人十客までに特に呈賞が行はれますから、名吟を吐きませう。 年 句 かか當 ら力は

あを第ま外七

8

句

會閉同兼開會日 題 會塲 共栗 おこし の稼 日 本橋 3 俱 三句 三句 樂部 橋麻 本線郎水 電 南 Ξ 四 先生 雨 谷選選 主幹 南 美 麻庄 萬 ょ 郎し 東入

題 虚み席題の正金参拾錢 天、 當日出席者に粗品呈す「春元商店格贈」 地 人人十 客に 皇賞 (出席者に限る)

**峯萬** ではし、 入悟 夢郎 後裡 主 明 紅珠 機鮎 見美 女 愚寵、 秃山. 柳稔郎阪 水美 車路 友朝, 水 誌 里 中 教

九夢

社

鶴

援

Ш

幹

事

晝 京縣目首 0 **都鎌三藤** 3 蚊がきて佛檀 萷 號 9 12 3 IE は 10 誤 b 0 W へ陽君野 高高は通言を表示に 秋

ま配卒▲もの▼れ▼げて▼ま日▼十 こされてゐられます。一日も早く全快を祈り一般之中。 一個されました。老人のこであります。で心で将軍(島根)、歸へられました。一日十七日一年一日。早く全快を祈ります。 「で郷里(島根)、歸へられました。一日、夜行で郷里(島根)、歸へられました。一日十四日、中国十四日、中国十四日、中国十四日、明病臥さ、永田里十九君は十一月十四日より病臥さ さ倒平早夜福て永ま欣 士: す正四一 子さ文 午溫月 京岭六 0 ん蝶 君は 驛創 育 立神 名十 共立無一月協和会 さ月 れまし 無盡會社様の した。 女子 樓上 お喜 春さ n び儲 で催月 まし 申しら さ十れ四 1:

新機

見

一白天喜三甍

水女羊屬馬由都路

上れ

10 H 永眠 3 n まし

▼九島 族▼ 小 同伴で遊びました。 樂 0 意山 点を表し 月十七 號 5 3 法隆 n まし 寺 方面 7: ~ 家

で本同私 本號 社の 事編 務所で出 致雨 し樓 は、鶴峰、 町 0 諸

君

۲

市倉九竹
左町番楓轉 

# 川柳パイロツト欄

# 凡の句を目指して

福田山雨樓

る必要が肝甚である。《大阪、星兒君》 九天にが足りない。その大きな下駄を 更に見極め からに取材がありふれてゐる。そして 見方に用意 「隣に降の子大きな下駄を履いて來る 提出

「事からからで、これではないか。そう云を虚女の氣品にあつたのではないか。そう云を虚女の氣品にあつたのではないか。そう云を虚女の氣品にあつたのではないか。そう云を虚女の氣品にあったのではない。「肌に壓され一般する異性の肌 に 壓されけり

數男君) を不用意じ、人物がはつきりせぬ。(大阪・ を不用意じ、人物がはつきりせぬ。(大阪・ を不用意じ、人物がはつきりせぬ。) であるやうで、それが出てぬない。下五

〇お隣の養女泣き寝たらしく更け 「新隣り」は無理な叙法である。今度隣りへ 「新隣り」は無理な叙法である。今度隣りへ 「新隣り」は無理な叙法である。今度隣りへ に大體想像はつくが、表現上 再考を煩け は大體想像はつくが、表現上 再考を煩け は大體想像はつくが、表現上 再考を煩け に大體想像はつくが、表現上 再考を煩け に大體想像はつくが、表現上 再考を煩け に大體想像はつくが、表現上 再考を煩け に大體想像はつくが、表現上 再考を煩けし に大體想像はつくが、表現上 再考を煩けし に大體想像はつくが、表現上 再考を煩けし に大體想像はつくが、表現上 再考を煩けし に大體想像はつくが、表現上 再考を煩けし

0

母親のフェルトで遊ぶ隣

(1) が、 (1) では、 (大阪、天地帯」も上五にもつ來ては陳い。(大阪、天地帯」も上五にもつ來ては陳い。(大阪、天地帯」も上五にもつ來ては陳い。(大阪、天地帯」も上五にもつ來ては陳い。(大阪、天

○お隣りでごやされたとは猫言はず夕飯へ又隣の猫が泣いて来た をユーモラスな句に次のやうなのがある。参表はさないと猫の句 なごは生きない。とて叙法が生温い。もつと~~ はげしい感じを表はさないと猫の句 なごは生きない。とて釈とが生温い。もつと~~ はげしい感じを

○白壁の藏の隣りで 駄 菓子賣りりがでない。また「豪農」は 抽象的である。(京都、丁君)る。(京都、丁君)と カントラストは、除豪農と一文菓子屋との コントラストは、除豪農の隣り一文 菓 子を 賣 り

この句は想が幾様にもとれる。隣へ夜遊び

夜遊びの隣へ挨拶 てれてゐる

してゐるともとれるし、自分の 家で夜遊いしてゐるともとれるし、自分の 家で夜遊いしたやうにもとれる。また、毎晩外へ夜遊びに出る場合も考へられる。句を作つたあとでに出る場合も考へられる。句を作つたあとでに出る場合も考へられる。句を作ったあとでの氣持が他のものに强く ピンと響くやうに出てゐるかごうかを見直すことだ。自分の氣持が他のものに强く ピンと響くやうに出てゐるかごうかを見直すことである(兵庫・石君)

隣りからまた金槌を借りに來るこの句から「また」をぬき取ると全く只のこの句から「また」をなしてゐる。それでこ句の場合重要な働きをなしてゐる。それでこ句の場合重要な働きをなしてゐる。それでこ句の場合重要な働きをなして見ると、事柄が至つてあてけな憎しみでしかない。隣と金槌を生めずのであれば想をかへて見ることだ。(大

苦しむ。句主の再考を望む。(今治、敏君)云ふその部屋は「何を意味するのか、了解に句想がはつきりわからない。特に隣の部屋と愛人 は 隣の部屋が好きと言ふ()隣から簞笥へ響 く 釘 た 打ち

〇子が出來て隣は、智 をよく笑い 「好奇心」と下五で説明しては味がない。「好奇心」と下五で説明しては味がない。 降いら漏れる 笑ひ」とだけではと云つて「隣から漏れる 笑 ひへ好 奇 心

風を これでは句にならない。一つの文章で稻妻は隣へ落たか婦女 の 悲 鳴 凡想から脱して、 かれたがい れたことだ。路郎師は曾て「非凡なれ」と説 かも言び表はさうしてゐる すること 川柳殊に課 5: 大切だ。 人の意表 題吟では努めてこの (大阪、 に出るやうな工 事柄がありふ 清雄君) あ 30

> 何に困 0 0 Ď: お い降り となりもこまるか雨 **陰氣だと云ふのか不明。** るのか受取り難い。暗くて困ると云 蛙堂君 ~ 落 ち 1: の窓をあけ 聲を吞 再考を 3 望

愛媛、 力 ルピスは 今日も隣で戀を見た

た• 「隣 よく表 と使は なければならぬ。 はらず、隣が最も 云ふ文字 のだから、 題が「隣」 意味をなさない。 : 60 ると「隣」 であらう。して見 そうでは ない たやうにとれる。 とあ 行 70 真砂坊君 はれてる ないに拘 戀を あ まり つて見 と云ふ を使ふ る である 隣と 0 見 0

4

分

は

爺 T

を

0 4 à

家

8

借

h

良心に觸

氣

ŧ

う

酒

12

な

h

聴きづら

1, 親 n

云

ひづ

5 あ

4. T

緣

のまとま

3

奴

h

箸

1=

ょ

3

0

ž

n

謫

本

持

0

1:

子

T

ロタク

提

げ

T 女

出 給

3 から 婦

0 Ŧī. Y

は 人 から

> 乘 辺

0

T

更 降

うちに母があ

短 冷

氣

な 3

L Vř

氣

附 0

か

23

頃

0

華や

か

東

京

富

士

鞍

馬

給 折 圓

仕

料

割

女

中

氣

から

利

か

す h V b 野 3 職

求

む

途

2

思 御

不

老

影

長 親

峪

柳

秀

粒

K

下五 C して物足りない。(大阪、 ある。この想ならば「隣かられぎ 〇れぎを煮る匂ひ 隣の でわかる。それだけの氣分では、 が拙い。 隣でもの「でも」が

久し振り

天馬君

不

用意で

煮えた匂

川柳

求め ある。 隣と云 ごを對照に詩境を呼び起 を取材するものだが, 穿ち味もありい 試験場などの空氣を詠つたものであらう。 ふと見れば隣のペンはよく動き この句のやうに席の隣、 (今治、 ふ題が出ると すぐ隣家のことばかり 紫陽君) 心理的によく 捉へてゐる。 想は飽く迄廣 す 心掛 U 隣り座敷な 0:

く深

られたい。 概して本題の出來樂えば難點が多かつ 回の課題には奮つて 自信に滿ちた句を寄 (以上○印は添削句である) た。次

句

### 投句 次回課題 先 大阪 切 市浪速區湊町保線 長 十二月十日 男 田 Ш

雨

宛

事務所

れても差支ない。しかし此の場合はパイ、但し外の投句と共に本社事務所へ寄せら れても差支ない。しかし此の場合は ット川柳と記入のこと)

煮えたかその 隣でもれきが

必要で

序

べて進んだ。佩耽ト愚陀の名は何人にも切離變らなかつた。川柳に於いても二人は肩を並 して考へられぬほごの親しみな 感じさせて 商大高商部に這入つてからも 二人の交友は であった。長じて愚陀が關西學院に、 愚陀と飢耽とは幼稚園時代からの親友 観戦が

してゐた。 以前の交りを少しも變へす、寝食を共にさへ 観耽が學業を終へて 結婚してからも二人は にも彼等は常に人生のよき道連れであつた。 人づれだつた。句会にも、そして麻血を打つ 川柳雑誌」の編輯を手傳ひに來るのも二

をふかしてゐた。編輯室では誰いふとなく 譲つた。そして二人は籐椅子に凭つてタバコ ヨイショとばかりにすぐ、他の人達にそれた 編輯室での二人は、仕事を與へられると、

# 愚 陀 亂 耽

悉陀. 觀耽句集が刊行された劉總を知るために群郎主幹の序文の一節を掲げるこごにもた(編輯局)

からである。 は彼等の愛すべき我儘として 憎めなかつた な態度に反感を持つものはゐなかつた。それ 人はそれを甘受した。他の人達も彼等の自由 二人に重役といふニックネームを與へた。二 L

なった。 て**ゐ**た事務外にかもした 餘裕が見られなく 所謂重役が放散

とも意義深いの(下略) 上梓したもので、同時に胤耽篇を合纂したこ墓するのあまり、限りなき友情の美しさから この句集潮騒は亂耽が今は亡き 愚陀を追

大阪

ると思ふ。

珠玉のみではないが、そのために珠玉は一層 ことである。兩君の作品共發表したもの殆ど 全部な網羅してあるので、渾然と統一された いかにもフレツシュな 感銘を受けるといふ づこの句集を繙いて第一に感するのは、 MI

いて ねるる。

にあり、その造型を貫く彼の現實的精神にあ 物質への情熱を以て結晶せしめた 造型の美 はその飽くまでも自由で大鹏で鋭い發想を、 くて言葉の手品を出でゝゐない。愚陀の真髓 めの新感覺で、足が大地についてゐない。夢それらの多くは、現實を飛躍した新感覺のた 謂新感覺の符牒にしさうな句も散見するが、 吹に成つたものであつた。成る程集中には所 句は、人間愚陀の現實精神の逞しく强烈な息 れてゐた 彼の作品を通讀して心をひかれた 後に私の手に殘つた句は、近頃喧しい自由律私は先づ愚陀の句を拔いてみた。そして最 禁じ得なかつた。そして私は新感覺派と云は の句が多いことを發見して、心からの微笑を

CHOCOLATEの匂が窓の足にす をなごの顔の 宿命のまたゝきもせ こゝろうつ陽はあか 7 加 死 ٤ 酒んでのゆ t る 3

寒かつたかに應 枕にとへば 髪とは 悲 た 枕は寝 ş \$ 戀 ٤ 0 脫 冬 の云を 13 た # 9 6 L 摆 #

大きな發光體となり、脳、は、 鼻のかけた まじめなことも笑ひほぐした 心 死ればよ ટ いと思ひながら電車 ٤ 0 n なって 9 ばらくに つて風の夜を歩むつなぐ都會の輕氣球となって街の灯が揺らいでたけるなってもの軽気が出るいでたけらくに病院をくいる ひへ 0: かずる て形 る 病院 企 7 > 道 2 たの 音 5: 7, CA 淋し 聞 0 75 L 3. 7: 4. (D T: い夢

75 すの空心に 0 だ視線が 肌 2 女 71 0 0 入 た vJ 4: vJ 息 考 10 吹 た -( 3 限 総 7 剃 vJ 3 3 草 2 H なの す 部 L 3

まるれえれ、でいごりつひに撑ぐ

て、同君ほご華 **飢耽君である。新人の** 4 しく柳境にデ 銳氣 t. ٤ 1 野 ウした ウし

夢に風起り文字なき原稿

作品を睥睨してきたのだ。名作を發表して、愚陀と並稱さ 7: なごの句で、當時の批評家達 佐突の下に 観耽い名は輝き初めた。そして次 眼集 II S か小り使 i 消 れつゝ か : え 戶 7 惑び B 群 3 10 3 小 のにせ 3 2

> 会灰 ガソリン 車獸搾 夕知焰 0 心上 3 の業火に か ば れの電れ 0 v) 7 殘 る折 1 外柱 L 9: 合 す 0 0 つ焰街 ð る 3 かのの 所 膝 ず ŧ 1) かい 7 家アを ない y 4 秋 いて 泥 鴨 3 あ V) 0 電ね なな ズめ 0 n

01 貌 町タンク問題 L 1: 元

家自身にとっては、己れの血液で染色した一るかにある。作品よは、世間にとつては亦一のの現實であつて、みして夢ではないが、作かくして受け入れた現實に 如何なる夢を織ではあるが、實踐(作品)ではない。 質踐とは の差別と様相の變化があり、愚陀亂耽との個の資質と性格とに依つて、こゝに織られた夢熱が織り出した一への夢でもあるのだ。作家物の襲術的リアリテイであると共に、彼の情 ではあるが、實践、作品)ではない。 て受け入れることは實踐の前提 視を怠つてゐない。あらゆる現象を具體 る 上海 エレ 自尊心 やうに、冷眼と情熱を以てする現實 飢耽君もまた總ての 硝子の中で 1 0 たタリ 戰 加 夕1 塗 人 火 昇 71" シー の間 ı と 底が B 秀れた作家 0 3 6 で 捨れ νJ 7: 作品行動) 質への凝めるねれる 巡 羅立 ş. とし 1: た兵ち

くる 阪車るだく 4 7 11 \$ 7: 0 相 か生

等昭 りとすれば、それは昭和川柳の造型を通じて る 0 社會機構と生活相への るべからずして存在するものこ のだ。 作品が、後 の心に反映するがためであり、これが戦 って、尚後世の人々の心に訴へ のでなければならか。昭和の めには、その作品が、 和年代の社會と人間の宿命的な性格がい そごんな作品でも、 世へ生き殘る唯一の條件でも 必然的 それ その社會に存在 すぐれ 川柳が 一云はば當代 の交響を持 るものが 後世に -( から

あ

0

4

も、現實把握の逞しさに於て、一歩な ばならなかつたいこの句集に於ては) ゐることを我々に認めさせる。 様式の多彩さに於て 景陀に一歩を譲られ 、私は欣然とせざるを得ないの この意味に於て飢耽君 の作品を 1: 眺 その表 亂耽 抽で X ると ۵ 君

現 +

からである。潮騷は親友愚陀への住き追善 に於て、 であると共に、君か將來へ だが、云ふまでもなく飢耽君 一層の意義を持つものと信ずる。 の礎石でもある の仕事はこれ 0

原

(昭和八、一〇、八此)

る機会に接しませんが、今後共よろしく なっ 有 難う 願ひます。 本 かしく讀まして頂きます。未だお目に Ħ it 存じます。若くして逝きし才人の句 JI 柳句集 潮騒御惠送に預 りまし 7

情の濃やなか點、たい人~御高徳の風丰敬墓と轉た羨認に堪えません。特一故人との御友 ます。装幀、紙質共に申分なく立派なる句集 至りであります。 御贈與に預り厚く感謝 いたし

鑑賞させていたいきます。 く我に返る事を得ました。これからゆつくり 席したいと念じておりましたが 突然の用事験かされて居ります。廿六日の夜には是非出 で八幡の日車氏夫妻を訪問しなけれ 來りしに却つて自分の淋しさ 光陰の疾さに非常に殘念に念って居ります。早や一週忌のては一度でも故人に 拜眉れ得なかつた事を 望し ては一度でも故人に 拜眉ゃ得なかつた事を嘸かしとお察し申上て居りました。今となつ駭きましたが、大兄の御失望、麻生君の落騰 於ける異彩の双壁と信じ、ひたすら將 く、その方へ参上 大兄と言ひ、故人と言ひ、共に川 ってゐましたが、只今「潮騒」に接し、 てゐましたのに、突然愚陀氏の計 が、只今「潮騒」に接し、漸心ならずも鉄席して殘念 ばなら 來を嘱 接し

先は取不敢御禮まで。刻々 『戦を享けることが多いと 信じて お わりま

が讀みゆくうちに いたしました。私は川柳はわからない方で 難うございました。會社への途中で早速讀 日は計らずも麻生氏方にて 御目にかい 潮騒」御惠贈にあづかりまして誠に 心なしかなき愚陀氏の

> かうと思つております。 てのよき組合せのやうに存ぜられました。 淋しさが流れてゐるかに感ぜられ、大兄のは II どこやら なほ~~ゆつくり 熟讀翫味させていたい 誠に似合はしき 詩の御兄弟また詩集とし 輕く陽氣に覺えられました。 つりした小照に似げなく一脈 0

先づは右御禮かたとく 東京 拜具

JII 村 花

親しく申述べたく存じて居ます。先づは取め みん〜とありがたく存じます早速拜讀。愚感折からの秋貴著潮騒御惠送に あづかりし **す**御禮まで。 早々

柳雑誌で御兩君の句に接しての 感想でした知りたいと思つてゐます。それは以前より川最も相似て最も異るものである といふ事をして頂きまして愚咤君の句と貴下の 句とは から一册の句集に斯う まとまつ柳雑誌で御兩君の句に接しての 馬の友がこの句集一句一句に 微笑んでゐる 0 す。まづこの句集によって記念されたる友情 潮騒」御惠贈下さいまして誠に有難 やうに思はれます。これからゆると手讀さ ~~と打たれます。純潔そのもの、貴下の竹 一御多祥を祝福致します。此度は貴著句集初秋の好季節となりましたが 筆硯ます。 るとその差がはつきりするかと 樂んでね 美しさ、 一秋の好季節となりましたが 筆硯ますま 册の句集に斯う まとまつたのを比讀 しかも淋しく痛き美しさにしみ 3 存じま

> ます。 取 vj あえず落手お醴のみ 東 一近く護誦の 上川柳雑誌に 上三太郎

兩氏の作品に對し 現代柳樽の感想多々あ 折な今更惜しむと同時には つらつたる御集[潮騒]御送り難有運動仕り候 愚陀氏の天像 柿色づく秋に候御健吟賀・候、今度句 もの有之候。 先は御漕まで

岡

です。亡き愚陀に猫の句多きは小生愛猫家ゆ 拜讀ただ困つてゐたところ— を云ふり氣のめけたやうな 川柳許り方々で御高著御禮申上ます 近ごろほんとのこと えなつかしく ズムの川柳を心ゆくまで 味はせて頂き欣快 住きモグニ

じます。 「CHOGOLATE」の句も 清凉にて経唱と存

あなたの

葡萄の一 處女のごと裝ひたき日妻 房を妻ちょきんときり 12 あ n

々訪れます。路郎大人へ吳々もよろしく。れがへませんか。近くに劍花坊先生あり、 うれーく候。後句をいつか短冊にして御惠送 75 置まで。 ご、後句は殊に好もしき「秋」のいきづきで 時

潮騒拜受、數ならの野生にまで頂戴厚く御 阪 堀 П

こそ故愚陀氏をなぐさめるものかと 愚考致 11 逃れて氣品ある編輯ぶりに敬服します。今後 もすれば俗悪になり易い 川柳の ならの御苦勞だなあい思つてもみました。と こうしたものな一冊まとめる 事はひとかた ます。御自愛を祈ります。 | 貴兄がます~ 川柳の道に精進される けます。 南兄の友情なうらやみな 句集の弊を D: 事

京 迷

ます、一通り拜見致しまして若くして逝かれ た愚陀兄を惜み大兄へ期待して居ります。 讀後感さやりへでも 書かせていたぃきま をお送り下さいまして有難う存じ 檢 Ш あり 高

受仕候 と存じ候。先は不取敢右御禮まで。 の程新り上げ候。 御 來 示及び御上 御亡友の爲めと承り、 0 潮騷」 Z 一層床しき事 斯道御精

御

して 坊も云うて居ります。 拜 あり 容は後にゆるし 顔の感じがとてといゝと思ひました。 この度刊行の潮騒お がたうぞんじました。第一印象とし 京 拜見するやうに劍 井 送り下さいま 信 花

主人に代り不取敢私より 打過ぎ居り候處 わざん〜御惠送か忝ふし誠に有難く 天高馬 肥の候御清樂奉賀候、日頃御 16 ß 今回は御叮嚀に句集 谷 厚く御 Ŧi. 禮申上 村 47

「父からの便

り道後

もあつ

上候。
上候。
「はいり度く其上に於て、改めて何か致し候為、未だ拜見仕らず候へ共、致して何か致し候為、未だ拜見仕らず候へ共、致し候為、未だ拜見仕らず候へ共、 知れず候。不取敢書面を以て御 仕らず候へ共 か書 夜遲 3

じます。詩靈い 羨ましく存候 「潮騒」小生まもで御贈與に預りありがたぐ 秋冷の 候愈々 よく豊かに御座被遊し 御健勝 過日は愚陀君との合著句集 京 0 曲 大慶 0 至 すりに 事と 存

多忙にて末だその閑を得す殘念に御座候。 讀の上批評いたし度と存居り候へごも 御禮申上候、清新の句風潑溂たるものあり熱 き候い 川柳街「十月號」にて一寸紹介だけいたし 何分

先は右延引な 東京岡本 同岡 かの子夫人 候。 平 早々

は新時代の川柳界にとりましてまこ とに らしき感覺に感じ入りました。愚陀氏の早逝 きことといたしましく存ぜられます。 惠贈潮騷拜讀致 松 Ш し、たしかな御手法と 前 田 Ŧi. 健

3

n

シックリ讀んで味つてゐたので

ました、路郎先生もよろしく願上ますり! 讃んで味つてゐたので 御禮狀が

申上げます。 限りなき友情の美しさから」コ、でシーンと▼路師の序文「亡き愚陀を追慕するのあまり虫の啼く灯下でユックリ、味はひました。 させられ、 拜 御無沙汰のみして、 恐縮してゐます。先日 いそうし なつか 御禮

り昨 ~書かせて 禮申 歸宅

> ても見たり、 耳かきたも の字、 御尊父などんな方だらうと考

犇々と迫る様です。 んの樂しみもなく拭掃除」、 來させ 「何んだか餘韻だ か何

奇妙な鼻の存在を朗らかに感じます。▼「鼻」を通しての句が特に眼につきま

秋の空氣の中に白々と建つてゐるの もいろ秋の空氣の中に白々と建つてゐるの もいろく 思ひ出が湧きます。 柳人には、コー云ふのもあると誇れる肩身の▼何にせよ、私の書架を俳人連に見せて「川耽がヤツォ」と何か寫真が云ひさっです。 は總でモギ立ての果物の匂ひと味の樣です。ふ樣れ表紙、ハツキリした組み方、新鮮の句、な樣れ表紙、ハツキリした組み方、新鮮の句とはのもいたキスゴの手觸りと、その目を思

廣さか嬉しく思ひます。 右厚く( 御禮申上ます。

みを錄して御厚意を深謝致します。(住田飢たゞきましたが紙面の都合により、御芳名のたゞきましたが紙面の都合により、御芳名の情に左記の方々に 夫々叮重な御書狀ない

吉田 長大山食谷気本滿 松前丘田 毎 谷川一徹氏(大阪) 毎 圖書室(大阪) 本 爾迷氏(大阪) 町二氏(大阪) 雀郎氏(東京)

上言一夫氏(Y) 地澤樂居氏(溶) 森村川蛭鷄田上子 省二氏( (大阪) (列幡) (大阪)

れ創を句るあのちのい



理整南二 • 雨絲 • 郞路

# 柳 白

ば園に見お谿催に擴張 だの依本語氏が表 → 天王寺公園に本 天王寺公園に本 十一月三日 、新公園及植物園を見物し、了つて植物 、東の話をした。席題披藤後同園長の厚意 いなして頂き、同人艸樂君は、薬物學から いなに出席され植物に關する趣味深き て た。當日は大阪市立天王寺植物園長宮南川柳植物句會として珍らしく書の句含を 、兼題の に茶日 披講があり行 の面目を一新したのを 山が取入られ、植物園の 天王寺公園內 耳 目 たそ

> か抱え風 題 多郎、秋無草、山 八步、紫石、 雨樓、南 水 柳 一八、 人、秃 俊 山

、 蕾の菊を買つて をめ菊 のを子 ぬを物 降 4. 云姿み菊 7 ふか 0 75 0:0 ζ んな植 ٤ たち 3 る 四溪山鮎亂翠多 花雨 花雨葉坊樓美耽夢郎汀山太平草弘

懸進

L

P

うこと

75 7

輪

1=

たは

日

醉

白

~ 社女

髮齒 氏

格の

0 0 の報素を

りし

0:

# たたの

柳子、

1:

した日

为

菊杯人

もて

at 畑飲の

ますると

翠をは柳

Ħ 市

街

温潮住妍 布し花 た

の花では一年鮮 、

席者

路郎

光、松太郎、友

太、飢

かほる

沒食子、 四葉

病路路の コア平小ココ母スパ熱學ススと コ時 크 = 地 同同同 同 熱に と子 一スモスが ス 雨 ス 0 )玄關の薬に )粛の香の中で寝控)威勢とは別に枯れ 2 Ŧ 1 ŧ ÷ ŧ u 代表は菊の 灯 Ti ススがの H スへ 0 窓に スの とき 人のこうろ 1 15 ス 7 サクくとコスモスの ス 影に 000 vj ス へおの 10 U 洗濯 歪る 散る日嫁 コスモ 4 歪 コスモ る後 夢 ı 搖 ス ス 輪さ 間 コ ス 7 u ス らりなら たぼく 16 V 文け の泡 = ス ・くべ泣 3 涙を見 = 3 ŧ スの位 ス倒 でも ŧ ス 長 1 0 しに V ぐと告げにる スの線が 77 0 ス 0 花 棺 te 加 ゆれて 行の釘を打されてる薬人が た濱 0 8 ス iE if 4. 咲き 3 長晴 5 見 置をか 3 唉をたる 憶 か 7 のとせ 1: せてゐる n てゐる か れる な ٨ ねる 貨 1: 0 搖れ て 、ゐる 向 0 VJ VJ む ち形 vj ひか 小鼠 鮎 松 園 耽 美 同白たけ 一種が ひろし 翠夕多愚豆新松四史 市太 夢鐘 郎龍 秋街 郎葉康 白同水び柳っる 同鶴同 小松園 同山 水 雨

紅谷眉鹿人沈紅 同同佳 茶茶 茶茶 底 は 茶茶い 花花花花席石島山紅良廻縁はのそ匹のの狩席 山切日出花花 7 花花開花 聲く 紅足 \$ かいに やへ題橋 5 NE 3 0 | 紅葉の そ 夕遠還咲水れ向 I. 支歪 にのの 夫巫障 ん山紅紅手 らき打 う場ば の紅面紅 への猫鏡べ乗 11 へのリロ無書 1: 葉葉紙 | 婦子子秋葉 葉紙 白 葉は 0 Ш to 0 下前 3 婆を一葉の日 茶電煤華茶秋 東 東 変 変 が え え え え る 1L 葉紅映のが でににの 車が背はの花枝痩葉 ٤ 0 花 降 5: 4 0 火白 3. 0 者 0 走 見待寫散下歸 -Ш 橡 3 F る中から 0 から も葉 お を思に散庭 入山山山に 茶 白 る T L す ちき るかつ 7 vJ 女 あ る t 入れ出 そめ す 75 3 る D, 紅ら 3 呆れ紅のて 茶茶茶けゆ 花 な來立ま 7: 酌 > P 1 vj . C 2 3 V) 葉ひれける葉け來 1 vJ 3 3 200

愚沒は柳た耽鮎溪豆翠か水白新艸靜小柳友俊 溪ひ同柳同ひ 葉溪 鮎夕 花では柳松 松 紫坊秋夢る車子水樂太園 女帆 翠 花花(食るがける)では美鐘龍子を干を け選

茶

花

0

屋

4)

葉

<

ヘ渡

る

草美耽し鐘人車步山郎な光次を翠を

は土雨 公公公行い家公 竹 五 公 茶 コ 温 あ 松 温 君 公 ま 冗 藪 位 園 臼 ン 室 て 亭 室 僕 園 だ 談 口子 園園園樂は康 菊 十 雜川 B 鷺の山りの にはのじ出か 感五樓 8 藏 0 き昔ゆらなる 割名ときなります。 む笑唄來云 寒道の い景し 1) な百 居色ば 1. 舌だひふぬふ公 の言 1 にう ば芝生 南 鳥なが子博 縋 0 り懸 L 公 日一 迷 龍 L 1 雨 が来ると、大阪 園 きつ V H ョ込路 11] 鉢、供物石 3. 骨 洋 氏創 羽 7 0: 0 立 す況 ルの子 を來鳴のくに館橋 下の石ぶの 立 御の於 うな あな ぐは 幹路裡 て お 駄かに門 2 忘 思 出機端 い並砂黄 3 4. 1-席熟い 事郎 茶新茶いれぬ U がてべ利昏竹り か師擧をし 茶白 らか行 得て 波入る日公日な 3 出變過やのれ 祝ら 祝らす清主吉辭御る援幹田 し山園山りせ山し りぎ や教をの路水 激示得士郎車 同新同新同秋鮎園ひ夕變水八秃多え春柳は俊た

無

市

實師報

1:

1=

を守

天天天天天天見天神天天天天天天天天大 ふ感いやした オオオ・オののに黄の オオオオオオ込オ童オオな 才 白一没友葉も遊綠路 口菊、耕之介、悉人帆、藤太郎、春 八九女錢、柳、藤太郎、春 黄の兼 中帆雨郎 にのへま I しばま 0 す 含金髮題 瓣師 洛 美 風 天が 未の人 里 才あ天 11 टे 八廣ぶ J: 返 少数ない 0 2 戀ぎに書出 ツのろ 3 心金 7: 白九 白翠 性前ま 手のを 事 束 3 1 秃柳申春 同當 12 2 たい -C うの縛 に形び出 ٤ ~ 1) 豆 山次仙光開 石 note 5: 4 貰 かし 水 朴私 11 言は長 路 一部 ふせ 山角白觀 Ä 一甫 同の 學 3 父をのやに のは 3 ٤ 6 7: 雨丸嶺月 勺 羊 大貴 鐘新 暮な 7 樓、 か楽 い任 まの繼なま る淋掏れびが L 4 鮎紫靜 にの 12 水 3 ひ顔ぎり 摸る 美水波 h ક 3 御重 期大 居秋 待に 碧紫遊 签 夕同同一變白八紫水 h 沒四翠 D. 市ほ 食子 水車 郎背步 柳艸 笑人峯步石車居樓鐘街る 水四 副痛

父肩應一久下母親酒父氣父淋灰故神善 をも 後人方向病類臭親强と(皿郷童良 同同同同 天 天 天新天雲の 父ほパ 種オオオオオオオ 開オエ 日世る 日の人のには出来できている日の人のには出来できています。 壁れに父癇埃目詭糸云神でへな 癪りに辯瓜にな 3 4 載って 8 口父 来きさつてて靴ちをログ芋へる た合びらる寝がの植笛のを父日 2 持だは味にれ無ちら破方数で視 1: 簡がた 天馬 3 75 L 3 \$ 提げ U け埋 N 3 U 1 を灰 L た はの 1. つば るを灰土父が B 思のが オ 求つ 7: ら薬 父父をづれか L て小空 灯あ考め i 步 4 脚 リカボ 1, 0; なり かる れつ らばずり 恐 の聞ま 叱落來商青 か 3 四り喰 ٤ 縮 à 25 呂し酌き 雨に 13 3 V 11 h V) vj 5 人〈 る L vj

脚ト觀桂友ひ葉春二八新遊沒新紅某葉<br/>
櫻同路豆二亂申八し藤同葉角桂<br/>
の太<br/>
次居月風帆し光光南步水帆子街<br/>
人不<br/>
郎秋南耽仙步ぶ郎<br/>
平丸風

コ子死父否父父父秋父 ○轉向の受験のである。 を寝 た ち 気 ツ と風の n かのう 父 ザー妻泣 ると、父親秀 げいたんなんとう は、女が久しいがなんしい。 なが久しいがなんしい。 交似 若さ らステツブ踏むや、 気真を引き伸ばし 勝 して夜がいたして夜がい へ1禿のる へに氣帶 テ真操だ 呼やみ父 茶か 皆たに 母のがののがた げ手は 植 0 1 宿の T にじ 入も父の有銀ま る木は踏 L 子 候面駄 + 先上立ち りる 來渡きれ居坐る難時るのなば待 ては影 7: 煩 し月 7 る V] 豆る VJ ち 2 L リみ惱 L 2

豆路沒點水豆八路紅碧八卜末柳綠柳靜水開鮎白三觀豆夕艸角桂二四白 食拿 秋郎子美車秋步郎 郎步居廣次兩次波車路美黨汀月秋鐘樂丸風南葉菊

まれれ まれ 約ままま tth 0 30 りれれ湯猫奥 ボガ っ店 U 3 ス心ポつ ごかのま 畑大入袋の寅 聲で父 1. 18 リのん眺壁り のス そうに 煙湯あるる 一人だけのといく言いても出しているといく言います。 色ト と名 たな とまむ つま 辞 呼をた の基 ま慌 # 見 氣 な振 す t いく高 0 # 20 呼る 20 1 まがいれ 6 nt まる nn n め中れぬ かか n 見旅の れき 4. 7 + 3 ŧ 使工な n ; 3 3 7 あいの 3 7 4 + U なり 75 お る 2+ V) へ宿猫れ猫猫 ひ事い猫ね V] 3 vJ け猫猫る る猫る

柳桂樂八豆友豆里沒春桂玄秃變耕艸二鮎路白四絲夢紫觀綠紅 <sup>3</sup> 山白觀 選 一十食 次風 步秋帆秋九子光風水山人介樂南美郎峯葉雨裡水月雨 櫻嶺月

ポホ放十新はポ綿心ポ決處詰淋ポ雀 (軸) キリストの上へ、 (地)たでで臓が (地)たでで臓が (地)たでで臓が (地)たでで臓が 郷惚あ横寄耳戀晩眼沈 中中ス つス in 愁れる顔り D. 人秋病默 九ポーとし ŀ 1 0 への席 そせのの 夜切まで るは耳へばば氣耳耳題 る耳 ば落ら即のが \$ 耳 あ 耳 な 耳 あ 耳 あ 耳 あ 耳 な ま が り し ろ し こ る か し し る か し に に が じ は が け が し く ス事てで は歸娘 \* 2 女亦 t げなスのポス ボのポ ス惱のて へ同ス知の はポ合 がくる同ににがく ス 7. ~ トの様に居によし 運を入しは別が トの影 1 0 まで 決める つる なのに合 惚のし物ゆたじいる 1 0 かさい vJ て行 T 底 なは受 惱 戻へ 生く思の耳たな若 居る 0) 2 ひ居ち i vJ る 3 音 ずけ + 5 車氣活てひみよ し春 vj 3 美艸鮎遊玄八水遊柳觀鶴桂四夕末し 路九新觀鮎 文

樂美帆水步車步次月峯風葉鐘廣ぶ郎錢水月美 居南光車石鐘樂介笑步

艦本年綱そ艦狂艦夕艦艦艦交艦艦惚鉢 札名期打こ札犬札誾札札札叉札札れ卷 持てはち直のとののをはを貼ののたを席俗が封綱い 天地人點名期打 it it 鑑鑑持ではち直の は、大人に鑑札をして、 大人に鑑札をして、 をもろて朝寝をして、 をもろて朝寝をして、 をもろて朝寝をして、 をもろて朝寝をして、 をもろて朝寝をして、 をもろて朝寝をして、 をして、 鑑年に 題も札札 もれれっ もう 札期行 はのののて て登せる そ耳耳や け物つ掛り見あ 言のも 子もあれて言 子 の札の ケて とだ哀め美せて紐れ老せせ り鑑れ しきが のたい 札下 ゐを引れ 開信じち 2 きがけーにれて ぐおでる舗 が午きれ違 る人すなるしなれだななるる豆なな きな錢 00 雨 v) ひり者 4. V) v) + ち髪 H る し艸あ夕車間夕二支紅新鶴艸聞禿路末あ友變白觀夕鮎鶴秋鮎八か白路 12

P 水峯樂路山郎廣み帆人峯月鐘美峯 路鐘南水

箸そ箸箸おつ

降掛掛ち厚掛掛掛土 (天)要領(で、)き飯にすった。 (大)要領(である)を飯にする。 (大)要領(である)を飯にする。 着 聲聲聲犬 領の\*\*掛け壁で生きてゆくは野で選出間で呑んであるけ壁で選出間で呑んであるけ壁を選出間で呑んであるけ壁を選出間で呑んであるけ壁を選出間で呑んであるけ壁を選出間で呑んであるがあるがある。 -0 ののたの 同

> 路八末變綠支八聞柳一紅紫 郎步廣人雨水步路次羊

るひづれひりれ美

美歩る楽郎

# の

りに同 京十 句一 の披講 あ 項 含月の十 2 西之 人社友句で、十七日夕 1: 町 Ŧ 言他 重要協議 防議と乗れて久り たのは 十時 PU Ŧ

8 5 持の持 箸つちぶご銀をたけり題 だまんな は師走の茶漬あれて象牙の箸が香れて象牙の箸が香れて象牙の箸が香いまれる。 箸鐘帆雨 翠雅二 麥幽南 とへとが手 山變水 0 雨人車 た用 てか きた 樓。沒豆 0: 仕付 弾か .1 出路 食秋 ねけみせぎ來 字かか 艸禿夕か豆山郎 神ほ は 雨選 樂山鐘る秋棲

ッ玩押玩(十)正日 イ具屋り箱 じれ か洗兄玩 十雜川 のなけ た歳后 でれな 子の ぶ子よ パル てゐる 7 平岩司 ず市たり調兒 目 3: 7 水 春同迷豐竹白陸輝同波竹豐春 郎 選報 兆次雅扇平扇 樓雅次背

オ名を握つて喰ふも可愛 有姿を無視して箸が よ く 大上げの日なり嬉しい箸を を店まで待つ 割 箸 の 新 世 左手で箸を握 つ た 子 も 座 魚の骨か箸でつゝいて今日も無事 (人 箸紙に電話がかゝる忙がしさ 地)盛り場の喧嘩や見"箸を持ち が親の箸子の箸鯛の目をつゝき でがしま らつな心 \$ はれり箸へ たの観箸 ツが懐れな く殖眠 したお 豆か終同同變同沒同左同友水雅食 食子 秋る雨

(五)こんな玩具に捨 ないまがり (五)こんな玩具に捨 嬉捨 でしく 資が 笑 む義着香ま 笑店あ : 頻録る水い女子れ節ひる た 父 ふ 員 り

陸同波互竹乃新白昌陸默豐輝悟同迷新春昌 互新乃陸悟た乃陸春迷同同 0 かの かの 水字平久れ字平宥兆 雅字水扇一平乃次扇久 兆水筲一

獲を納めた。 コ敷 來會下された事は彌か上に 此の句會 惠ま中,疲勞も見せず、珍客安川久流美氏を伴ひ用,まさかと思ひ居りし路郎師東京より歸宅新立襲ニ回の句會としては 活義旺溜せる折訴難を傾くべく、集る人々二十數名、當支部計量を傾くべく、集る人々二十數名、當支部東雲倶樂部にて 西 田 艸 樂 報東雲倶樂部にて 西 田 艸 樂 報 ツ居 を納 立囊十東雑川第を月雲誌 締めて Ħ たくう雑 美氏に雑吟の選を願 かれま 妹舗な を喜んで居ります。 二道寝吟 か・ ぞ十の 0 足 へ歳砂に らな埃 ふ久流美 ふなご多大の收 先生選 雀史友白 踊 柳子

北眼 冬風心 素通り の輕 街 の集な 3 vJ 75 L 47 0 席だ 2 L 3 る VJ 風 た風 り無

たのの

乃欵豐た新昌白司陸春る迷乃昌乃 か 0 0 字乃次れ水一扇郎平背 兆字一字

(五)已は日子の不作。 (面)くろがみか械くがぞ (同)かくて各近し役者のドイン管のがしても秋の雲にと、近になるがいさくなくれっても秋の雲にと、がのつきでも対の雲にといる。 (同)長男の一直でとなった姉が (同)長男の一直では見男さい様なれば 大はもならにする朝よ落葉する の質は焼き関栗は手 慰 み 原の質は焼き関栗は手 慰 み 原面 長 男 のの質は焼き関栗は手 慰 み のりない長男だが嫁は来て、る を男のとりイをか母は喜こ ん で 長男としての意見がシンと な 叫 クリストを信じ長男 夫 婦 な い (人)長男は一燈園へ通げた き (地)長男に昔ながらいの 家 の (地)長男の小さい顔を疎ん に (軸)長男の小さい顔を疎ん に (軸)長男の小さい顔を疎ん に 已ふ俺 の屋は一地 十の不作法 つ勢 作な顔 伊から が焼けま様は L 3 ころかな 見過弱み p. n き落 ち與れ 3 3 3 る 4. 先 久友青艸小夕史青雀潮南 流 松 踊 生 史 紅白青潮小 同路友白同 小南 雀夕 小南 松園 柳子鐘錄 人柳園柳 柳踏 柳子 流 松 蹈樂園鐘錄踏子 選

: 反へ强く夜 亡き父の訂1 () 尾 来つ子がもう? ひを変え 夜惠 池池 同同佳 軸 H 雷 醸 同 ) 別解病 利)買ふ人にゆりをまて う遠雷へふと空想がゝぎ )深夜業冷たく窓地がへ一つは消した。 きの空想とれ 炎の話で 発 **兼旗麻旗日** かへ 立でで 様なあり だち 6 だ つ旗題 **7**: 照 省 がのチト辛すぎる際のチト辛すぎる際 して ててて 頭 12 ふと空想 定が 手む日つに 旗 9 紙旗車 くれ族 そり、業の手で変素の手の手が来 常直の = 3 な物 10 0 > 旗つ 2 朝の世界のの電影日の電影日の電影日の電影日の電影日のの電影の電影の電影の電影を表現している。 窓の月で夜 5:12 心がりぎれたり ところ ある 待つ 0 灯が総 あ は 쪪 のば け車靴旗 日喫車 0 3 H が業業 5:1 か 3 3 7 、夕刊や ごらず はなし が決り たふ H 5 行みのの脂が映ぶと 下な茶が來 話 加 な切 多 75 1 司 减 へ灯灯汗 VJ V) VJ 白 樂 夫**小**柳艸同潮同同 松子 錄園 樂 人 雀踊子 踏 小紅青 紅青紅 雀潮 佐南友夕 与 木柳帆鐘 松園 選 踏 踏

憂食食食 定食すで で 豐年年 理通通ご通通通 質勤勤の勤勤勤 しな再 翌年 (同) 通過勤の人間の (1) 通過勤の人間の (1) 通過勤の人間の (1) 通過勤の人間の (1) 通過勤の人間の (1) 通過動の人間の (1) 可能の人間の (1) 可能の (1) 可能の人間の (1) 可能の ( 1: 湖 า 事業に国 が 記念募集兼題は同食堂に席 勤迫は 影 III 周 硝 節 社柳 口 4 年十 ۴ H 子の 0 互ひの固き結束を誓ひ 年記念日である。 人の方へ 甘仁笛長 1) \$ 三 追はれ タカ 喫茶園に於て 定 Ł 3 D: 一時散會したで柳人記 食なたった 10 1. 通勤 れなに 周 がんで 7: の蟻 1 2 ٤ 0: 3 ~ 2 て二人 通勤 る米で る靴 年記 n る秋 1: 多 サ つべい 4. 年な る 居られる 人を好は 一人出 11 午後 福す T ž よろけ 人 7 7 稻ふく 3 1 を誓ひ、賑やかに、記念句會を開催 「記念句會を開催」 念句會 して 1: 間 75 お寶喰な L 廣 生はい 晴 通 花 尼綠 江天 る塚ひり れ来る 來味 7: かけ火 7 3 3 女れ勤 心之助 痴 (松 三青紅友

次

决

X

る

H 江

月

綠之助 人柳卷柳醉冬三利赤莞 法卷柳同 選 句 二人樓生郎郎陽路風

選

1:

朝朝夕何練豐夕朝靄靄靄か兵年靄靄 獨獨獨 同同佳 在雜川 無無無 席かに 十社柳 別蹴 Ĥ 雑だけ 男男男 え大夜 さ包の生靄膝火盃阪い押獨 足しい 人を鏡なない。 拔山 が鉢少音年 3 1 いる。こんで胸 根 1= 活 3 0) 75 少 大 7 句 畑畑 屋が知出が日はの れ欠頭 こ酌 みえき髭 だけ ٤ 0 3 1 の満男 4 所 なく -0 平 3 押が暗靴 げ落意と 陽 1 長 洲 75 る 褪 塚 1: かが賣か 1 炭 る 椅子 7 て付識に 3 531 3 かい ٤ 44 17, 5: 0 館 默れな出 7 : 島 あけ あなれ 着 古 ざ待奈 p. 11 0 りる りれる V 塵る る 3 本天 V) ŀ 3 六痴 詩 同天祥莞<sup>互</sup>天柳同砂柳天 痴 選痴 詩 痴 柳 祥郎人 柳同天柳卷 朗同卷天 人 一類人 痴選 選 月 月路 朗 人人

二人 つに米根 E 11 衣無う数主世 か・ 畑 灯 IJ. # 0 VJ 元 1: h ī 村 Di すな馳の V 天同柳六天柳勁柳星銀天順 痴 郎

原原

をは席意

直氣松君

にに原に

0

線持

町靄

0000

屋晴

根れ 垛 亂

同柳笑天

選痴

人

子

朝題地

0)

D:

かい

2

1:

浪 ト 隊 眠 つな地喜の帶 3 5: 顏 ~ 自に 泣 5: 3 7 3 ツ 月を船港をな にか 4. 微をずにに トです 0: 笑長煙 良逾歸見 完成) 天米 振出のむや消鳴 喰 出 3 りる灯けみ 3 俵る管 3 CI 柳 銀亂天氏痴選 天 選 痴 氏同六銀 柳同銀柳亂六勁祥人 選知 星笑人 郎星 星人笑郎郎月 人郎人

横 兵三汗 顔 隊年だ 店 を兵く席

7

めを兵

へ兵

軸 H の題本

海 0

発

こ横

3

實質減實か實實實卷即印に即り即即即即即即 軸天地人同同佳 雜川 へかかて めの気安 る店 社柳 Ti. 1 H 3 すて 實實 心 町 於 合 720 び度せなへ中持あす淋に質がたの質 自 見し 句 るのと も 即一 文念 無 只 が つ 助 11 4. 口印若 1 3 夜 0: n か冷 小 # 文 かっかいい ラ 句押 水成 な仕 子一要あせ 3 戸な プ it 0: 3 る 3 75 金出れ金 3 1 水變破車 雅變寬紅水小變紅變水破水 變 柳 車 人鼓 幽人柳 車子 人車鼓車美 石車

先資爭爭重 故三 だ月遊暫遊職片遊 揃酔な 同同佳 まれ子らなでになっていた 十雜川 登本ひひひ 草でにた席誇着ばじ席押冬 かの 名 一計柳 前故日 れ度1賦の 塗 へきのに値 夜 . 頃鄉 鄉於青 靴 心 綴 の 返 しまりで を 返 気 切 切 が きりで はりかも での 句 間はくへ ひス付上をけ 年 いぐと死 下大 紐けま顔腹 劇 にれる來 は親り めがか生 遊そ松いぢになに る待て 女家 事 がはるかか う葉言め出り別小れ あへ活變化か化 務 んで 歸な と持い出決 所 居な杖ふる米ぬれ柳るりし苦 v] v] けち脊しめ 度り度る 熊 變岩 5 水紅破 5 雅 子 變岩 寬 水 人 5 變 寬 同 變 人 石 美 車 鼓 美 幽 人 石 棚 車 差 人 細 人 谷 紅小水よ變柳し 九吾 流 柳 し 人 選 選報 錢水

軸同住遊小遊 保保添保保保 妹敵双 故處 紫夜急病の場 遊色溫旅包旅 錢日 し江だ討五故 しのの夜むけの風な添親ね詫かが願て戸 2 暗雨くへのるび悪泊 明るるか が父へいが交 歸は基 上に遊て の映事明が 保きふて初保てくつ る真然 無 け煙るかけ り保護 **吾覺ぶなつぶ乗** 明 好静護 置對護る云て松な盛出 心さ 75 りりし互狀せ え旅りて旅る 願り願き面願るび居士 る盆土りる る 讓紅變一九紅公靜吾紅變九讓獸變靜紅一同紅靜變讓<sup>耶</sup>一松讓 文 選 文 選 <u>選 太</u> 公 人笑錢 獸水 人錢公 人歌 笑 歐人公 笑耶公 同松 太郎

同口口口口口

情惜惜惜惜

太郎笑人

太

水

1 1

順故順秋順目 禮鄉 軸天地入 社紳 軸員佳 同佳 伊十 雜川 會士 禮鼻 葉葉 杖杖題豫月 タ 鍋 5 坂順順ののの淺も 立 下禮は笠夢がく ししいなさきされる女質を 惜惜惜惜 相廿 景佳 りはは 色い順 る娘奉暖順見順を順 さかって 鮮硝 はる口箸ふ小く 頃の謝か禮の禮めに のほまりのであためてみたり 悄娘惜けだ供す 人 士日い皆士禮つ禮に目て姿て振禮 社 П たへ渡を事二、確 5: ペー 撃な 3 句 暗 ÷ をは泣とふ こけのなり とき見る ない れい ない れいて あって あって あって あって かんこう vJ 七樓 妓のに大 通かつし醒着やんむ n 戯紳な笑變り言振ぶまのま 7. 上 L あ れまりひ 雨ひりれし子れゐれ紅 V) T 曉 群吾紅一人紅變吾識松靜悅謙松 選 太 太選 歌水 笑 人水公郎歌洋公郎 **吾同紅變松紅松一變** 

童 報 義童

かつたのは誠こラト)。
上げて下さった。その爲に作
は樂燒に揮毫をなし彼氏は かとはの 夜雨十 では月 あ小廿 社柳 る降九 ながら な日 氏より町紀 嘴合墨 かった 墨の 損お どくであ のはし太郎 じど薄 3 は 作 賴信 ま + 世 女 お紙 7 0 1: を與し ٤ 2 奥へ 夢 一た報 な焼同秋 々葉平葉平々夢

病文コ松笑同素張コ毛いコ嫁室金ス葉ひ情人リス布ンスく スモ杖 ひりのが切って ス蹴のス 30 \$ 10 コさ八くがおががある。 てれ 1: 魔娘お が轉 しるい ぶのみ V) 3 Ut £ 松松松松がの 4 葉葉葉中、 込 L のな 小梅紫晓背小背同紫背小背紫小晓

松市陽童明樓明 陽明松明陽樓童

き知じ

つか

5~

て信ねな

るとは思います。

だばくれ迷て母迷

6

な思

ひほはが折

く席筆

念信

先

0:

ふるいいっぱり

n

1

書く紅筆。更

た許

への涙

迷迷轉關迷不迷御信信宅伽信幸信神 も歯のなへ水を續を

子の來母やな叱

たまつ り方母

T

聞

4.

b

て

成りまと書の愛さに 笑い

は

と書

謝熱に

含

盡

力下さつた事

事を茲に 感其の母堂は 其

母同峰

君報

0

はつ

位見来

同同佳短短秋日短短 は待した根 6 /2 信 信のて く得い日な しのた む てきか類二鶏らら 50 かか の驛夜 でがま人をれだ へたい vj ź 如暮一れ連追ざた を下早 舟同文支清琴葉好雨翠同同玄同四文琴絲 蝶六美人平陽

てく って居 7 を白 學型 n L らみ 算る 01 01 3 る 3 夢 お葉文い清支 あ琴文琴 3 選や 9 葉蝶人雨美平蝶む美六 美人蝶人葉 此の第月社柳の開光七大 ふゆてう 大 11 13 開く<sup>°</sup>集る者丁數名殊に其光君の病床を慰問する為。 七日夜 於葉光居 福田 り氣や妻 \* 1

氣

#

3 ٨

春春春春 見となに春ののいい銀 を書病大へ書理 慢夢を ごい碧きはを枕青 鏡壁下駄 高和が はかす し開知春 高 T 出た L 少世 金いつ vj 界へ應 つはてて テ地 島 6 きなゐゐ 立切 3 3 沐柳葉豆青裸南九一 天民光秋兒人子錢羊

私青青青青青青青

製されて T 氣艦は膝へP に座 次。 ハムは淋しが、な女なななななない。 な女な 目が、 たべ り櫛

3 夜げ 3 VJ あ交多玄葉翠好四舟人玄舟玄 P 人美蝶郎六平夢陽葉

女の氣に風に 12

L ŧ

-(

のつ

あ居

て淋 7

H

の忘

7:

田 縋

軸同同同企兩青青青 (同) と 空遠 枕 枕 直 松あ松定交松葉き葉紋叉葉 ほせ (業 教 ) 青青出 に 苦 は 大 が 點 杖 が 監 表 幸 幸 世 。 苦 は た 太 300 ふ手関にえた 酔む席ふ手團 の子題 の枕け犬日や けしゃす松父振二 血そ紅い時恐 る見財 て起おるへ記れ枕 への病になっています。 なやみになった。 なやみになった。 すをかける 手世 たば とれ葉 る 置病 めてを供光行は杖に 暖財布 J: てがのがい にあるけ 金を歩んでする らるを歩 りた日に た 布 T 見いが血ふ n 海刻 高る く拜 Te 7 で 寒て過 で さ れ さ 手しき けれ松松ま £ る事績をて 3 空別 L 2 提出に出版 て見る 日ばくわる捨て か と云 12 ま變 な ら葉葉れ水 3 V) 75 n 置 れ帳りりす vJ ふれ杖杖る 3 て居て vj

→角豆詩南葉裸<sup>人</sup> 九變豆葉青車 水變裸綠詩 綠同變南角昨吞凉白 南水 選 面 選 羊丸秋朗子光人 車人人雨朗錢人秋光兒 雨 人子丸夕柳園戀 子車

そ飛そ些カ短短短む氣 のびのかツ氣氣氣つ短 + 短出短のト 氣し氣短はへ金とし持題 妓てだ氣る出で言てつ + は切れる程の は切れる程の なと友にか なと友にか なと友にな く 以見すも癖さははもて短五大字は光てか光見 H それられ めら 用活れな たも L 云 路島 4 しれかすり ふぞれ 5 CA き同利同案路あ正一柳郎生 選報 さ 生女甫杯秀

光光霜光光明明踏明明 又二二二二二 叔 日 日 日 日 日 護布錢プ風 かのりの へ欠 年日型れ布財 川架ぼり散髪 3 ぼ明髪も れ犬るをさたかかまたた れ犬るをは間れ間を言名を布 1= き創にす るにかか 刺尋握に て腹は 會じ手眞出も 日つり toin しれつ空 て見 きな白かの豆酔かなれ立た 合て財 大阪 ひれりるちり互 りりしけた る ひ見布 44 角水青裸葉林同九同變同豆 變豆角柳詩 文 丸車兒人光 人秋丸民朗 秋

保財一心秋

氣 氣 氣 氣 短 短 短 短 いぶ熱朝 日豆雜小 嫁花花 のも婚婚 > つ帯 好るとが席年つ魚り 婚婚のも婚婚 3 8 ん云きてな遠題をけ視か 立ンなになな ひも題方 振舞のに は ちゃのな社河 るやシに人 る長豚 り 魚に頭なる 食の群屋 くに 病 て違 誠 生樣 酒圓へり Œ Lus タてな吟 クはや雑雑のが酒う 魚聞とかて たで短 2 んこ 魚周廻 7 ラ つ魚 ટ 眺 ٤ 2 ٤ o it を章る A 5: て山肴笊 徹く اء にへい待を 0 6 魚 2 腹が 4. ち てく 家な てく につぎらで切 路れ とかりなーで に笑 見 75 0 Do 0 < 0 P p, 會路ひ ねる ゐ路 たて る る 3 り番る ab VI 3 3 り群し 3 V) S

氷路柳芳一方<sup>耶</sup>柳利路柳<sup>郎</sup>葉山筑同利山あ芳正柳路<sup>耶</sup>柳氷正同氷同同 3 秀生生秀 生彦女一甫秀生 炭生秀一杯正 秀炭甫

映 珍松 青濁映青珍樹映濁紅青珍濁紅珠濁青映同紅ト景蟬 選 电選 工雨水珠雨景 珠水樹雨景水樹 水雨珠 r

> でない あった かい かい あっない あった で かい あった で 投 い 前 で 投 げ と が が な な と が が な な と が が な な と が が な な と が が は た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に た か の に か (今治) 桂出桂桂晴す受ね かま笑持 濱る濱濱れるける 卜同同紅桑映青水紅珍映 æ 樹生珠雨

てな

郎炭生生

路氷利路同利

切

モ菊ト 軸同同佳 0 ク増 1 三年 第五年 1 三三人へ ٤ セのキ銀 8 イきイ り風イ 伊 なにで箱ば高間冷戀もマ 豫 vj りいのためがり 相 互 たるる 渡邊 曉 空 1慢風 りそう こぼの 空デな ٤ アーななり 0 なれ音 曉富木小同紫一童童上 選報 童夫公松

海進進進唯遠が級軍軍一大

プ我見へへの言な級月 大進日本 (福里 進 年 日本) 大地日本 (福里 進 年 日本) とは (日本) とは

進思意活最汽

すづ

强むひ識氣後車

る

祥一汀秦 穩 柳 汀 義 硯

月可雨詠水葉雨正水

んで

於

公

會堂

獡

天

は進た足の友歩調

揮ロカ

iv

0

た1

(軸)姿宅に埃のついた 幸福な子であれ母であい (軸)縫ひ上空産衣をりへどと 産を縫ふ心の底にあえ (軸)組をなる子のおとれ 産壁のともかく丸い身體 産産のともかく丸い身體 産産のともかく丸い身體 のしまかく丸い身體 では、世のしまる者 に同)出産へ男ありたけあわ (信)出産へ男ありたけあわ (信)出産へ男ありたけあわ (一)出産に心のしまる者 常庭 い び る 新鮮な空氣に叫 び る 新鮮な空氣に叫 び る 新鮮な空氣に叫 び る 新鮮な空氣に叫 び る のしまいの。 (世)呼べごもたい煙突の無 同住新鮮 吟カラ 社ス 創 I 周 年 記 眉無登 くわれ體な (出雲、甲 るふり 1: 太表山宵 い笑ひてたり なし小 微 向 し情靴 りき る笑 田會 十曉小<sup>明</sup> 小心背心紫心樓 樓府明府陽府 靜童松 府松樓明

る子かる放止

0

スター発田車心で 唄田い田田田田田背 蛭 草草草草取びば な取 「自ト題のの詫が々る る背 3 スタートよ今日で、スタートは今日で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタートは中で、スタート 舟"風軍 ツトする ひ草 取 1 手りり日 VJ 痴 田義天

2 1 章 終 奈 義 泡 一 硯 愁 <sup>天</sup> 終 同 鴉 之 翁 泉 助 詠 正 鳴 可 水 天 助 天 鴉 水綠章 愁 奈 鴉 泡 柳 水 硯 <sup>人</sup> 湯 水 煙 助 泉 天 詠 水 鳴 葉 煙 水 鶴 緒正人

ススス社神緊成ス

寫日タス先

1

うさ卒1タ

雲故

無持の變に 人裏 の、無しくの

見へ

3

にわ雲

ぬ日色

みなな白

同佳

しなり

てねた つ日はの

迷路

と言

谷苍二選

立 -)

戀題泡の題

3

ん間 かが今

直 な瞬

塲秒

の六

小を

使出

水汀

煙雨

會經張功々

つ體分が

水

が繪1日 彼すとし カ月 凉靜潮夕 住 部 X 汉 影 と彼女ボート にかのさげきも見かれる おり明日と信じ運命 ス甦 1 錄 1 卜愈爱 りへの席 生. 1 日の浴返ふ濱門屋が (1) 1 自はへ 0 1 赤水びるんへ ス信覇なス 4 七十 御は疲矚朝 3 トの程し 1 コ \$ と波平原は場合は、 目がが雑!! 以1 iv 1 キュートに暑が見れ F ١ 「風にはぎい」 1 るが意の と吞 わにめにて體 は事なない 強まな なも む見 へて凉物を 1 子は知ってる たけき 一き 水圏り t な重立 切ぶ難 暮殘あむ思運鶏浮 淚知 る人ひび 4 5 3 じ粧び

華綠柳綠華汀<sup>天</sup>綠汀柳綠汀鷺<sup>村</sup>綠柳同同鴉華汀<sup>助</sup>天綠鴉天詳華柳田鴉 之 之 選之 之 選之 選痴之 村助葉助村雨 助雨葉助雨天 助葉 天村雨 人助水人月村葉緒水

111 九氏病 氣會 0 + = 日须 の例豆 11

中

(秀) 女別二朝給莊杯の 同同 同秀佳 (新との一般に対するとは、空間の、 一般に対する。 一般に対し、 一般に対し 骨い題月 世界の位置が他 一下の位置が他 一下の位置が他 一下の位置が他 一下の位置が他 一下の位置が他 十二日 かい 於 事 務 空パル # 所 追てかつ農け ひたプて夫る となむ遠 ŋ てとなく僕り 44 て夫るぬ 崎 井 祥 夢 月 同卷迷卷莞卷祥莞夢莞 人柳同卷柳卷 月 選 選 月路迷路

句 3 n 皱 題 は 本 社

消肥てまか えりるり

終張登田大比草路 奈好華夢奈朴草張比愁傳 邀助 步方利鶴 佐 選 新郎村人詠泉路塀緒天重

町菊今菊將日招諦へ、の際ため

御打若玉豐貯ビ

天地人 り坂桃 ッングの球·魅烈如く女の妖を下る球の様な戀だの夢三十が撞けるこ 張呼つ日 0 吸たの

天)う

ざん 屋 真直

遊陽白豆葉

帆光戀秋光

> 友句 戶

村明 明珠

春幸明華春繁華明吉春明吉華春幸吉竹繁  妻となる影が折れて る 金漂然と 來 た り 影 に 似 子猫が何か知ら影にじやれ 子猫が何か知ら影にじやれ 子猫が何か知ら影にしやれ の まる と の 影を追 ひ 詰 墓場迄一つの影を追 ひ 詰 金似れる見いれる日 裸 同線華田比互 鶴佐苦選 助村緒緒路

十夜つ病ひ話紙 雑川 (量) 工場 (単) てる 好きなひ 遊め床 ムしか 下てち兼 つ 護な な が が め の 人 題 + 一月 のびた 75 微のい窓りる 風頻かを看娘き ひと研究室からやつてしと夢で話せる好きらか瞳にうつる好きな人 にんの親切好きな人 にんん たっぱん Hi vJ へせた板の 好 つべ きな > U) 髪 7 S 鳴 ッ くるに秋 7: 1 い風 12 \$ つ風風 かが臥冬むがと つてくる 龜 15 00 75 す 吹 7 す 絲 井 人 る きる風風り る 愚 靜公愚菴ス緩噴雨 靜影一九公 太平龍巴△紅兒 報 太郎馬六平

ぶき酔うてる客にほ 7 D 通來 6 あ り士れ頭れ所 V) 7: vj 3 3 春繁同華明繁明春華繁同

水珠堂珠秋水堂

っそ

白

天盛天婦り婦

ご婦り婦紋羅塲羅

举

月遠眞大給が珠阪

珠典チサ珠開

٤

L

1.

3

4

の席

女女題はな

過連女

のて

3

3

ろへに説

キ育明

ちを働

てう

3

る

4

左 捐珠右

3

5

0

٤

居 濵

柳

かほ

\$

石なげて池の: 夕暮れの池に を が ようなの池に 洗髪の 女 変をひそめて 3 同同同膀 光に淋しく っくし 足の蠅 が朝 降る ス 飯世茶 濯むも 趣味は宋朝 2 題 を言 ガールの笑に顔を見い降りで、その女に雀下りてくるの女に雀下りてくる 力" 池池 ~爪 てえな 夜 く…ろの池を女に 能の 影 な な 寫 つ て 青 女はひ 葉でなながだ 雲を が切の 0 とりか v まま教 暗い 学がって 流 7 3 ~y 夢 p. 0: 羽 きめ 降りる へた to れ生高愚 去得がい 75 て る 5 來光ゐ N 靜 7: る 3 3 る V) 3 る vj る tha V] v) + v) る

靜噴青愚一 太兒鬼寵馬

同噴公同絲愚太愚同靜同噴青絲籠綠同 同同青同緩靜絲 選 選 兒平 雨籠 兒鬼雨 紅太雨

算算層唇唇子羨まし 整盤数のながのと許さし 風遊鏡殘鈴そ臺る iI v] のんに蚊 の音に冷めたい。 へいっぱん、、喰、る身分じぬに向ってフット出いる身分じぬの氣持になってフ 33 ぞく 0 が外は武 8 P な口はも B て居る やかしり 別壇の第一線をめば全くズブの新人 笑淋 迷ぁに **る鉄ないせ赤忘のに**問 3 n UL る損り男す され娘 て部 17 v] 7 互 同虹洋成 同默同白同虹白同同默同白虹洋 成虹白默洋成 子路童 紅 羽 子羽 羽子路童子羽紅路童

# の世ン なや vj 生, 飯 飯を食ひ 同白默

室 羽紅

明木吞同某同九木ひ樓 山某九伊ひ明某喜同水某九吞木選四 さ選雨 D. 坊石舟 天石し 樓人天八る坊人山 客人天舟石

な對増なまか披白こ古役置け據 り面しりれれ識うえ紙目きて品 古手紙目きて品 と 秋り が輕し出か音 九天・某 な風な這暮見 し出か音夜呂りひれえ 同山伊明きひ<sup>互</sup>杏同某九吞某明<sup>林</sup>明某吞太同某同九同水秀明ひ青共山 雨 んか選 樓八坊じる 林 人天舟人坊 坊人舟 人 天 客太坊し吾 樓

いる水をする る實來る殘山 

弱氣弱弱 點の點點 且題はわ子舞 つい供妓麻 りを邪 當を氣でてんに泣 なられるので出 たな喋 なななる 寄 潰なにと 者なり 句 清のは立る しる 記灯る めしり

水松山某山ひ水吞互同某秀青 雨 雨か っ 選 人太吾

女女懷女唇國唄 軸天地人 軸天地人 軸天地人の人に 教教が教のなは 師前兼拐暴殘狂 三名名名へへを席員師れ師色まし 蚊拇トつものほ席 の女題帯風飯つて 美教 の雨をて 大しすぎる 数師すこし 女 教師すこし ふ灯テル はない ない ない なん ホ赤ルの 上 が秋でが女とに のが テいの時 の 高来がきるる 新るぎきるる 香舟•某 なり なり なり なり おあ る 山吞某九某ひ伊樓 山草吞同某吞九樓 伊草某明杏九明 雨 <sup>か </sup> <sup>器 面</sup> 同某共山某喜九 選雨 舟 人舟天 雨機舟人天人る八 八堂人坊林天坊 樓堂舟 **樾人山天** 

近題常常常の來のの題 時時時聲て非聲 會 空をへとに非常に非 叫陸い世常時生常 ぶ相ふ帶時 發 刊 机大團もたのれ時 0 のき體引聞秋た 昌樹志 が寫伊しさと愛 な友切れ能があれな國白清 ゆれ記りるり機柳水友 れるりりるり機柳木友 ・ 大阪 雀帆 友雀耕マ耕友白 踊選 踊之サ之 子 帆子介ル介帆峰

野吃靜蓄上人落先靜雲 海ひ彼涙かオ 道の寂寥が相第生寂が 青玉岸と万きまレ か子にのんは坊かにな 静 年 線すっ我もグー 製造をおるなりで旅び ゆの砂花屋吾主戻ふが寂けかの花こに、るつれ、 ばへつの、似野野、て野 は旅山旅か風 うなかり しながり ながり ながり ながり ながり ながり ながけ出る はははれない。 旅なきかま愁 ってり寂ち人りり 美 同同同鮎同白同觀同靜 同同鮎同同卜美 報

Ш

柳

風

呂

0

月 太 菊

呼愛灯慰心ふ 末行結そ ひさにめ い 止れ生のかに題 を話やん お足續出許へ かつなり 田 る駄きし嫁る 水 同水同夕 車 翠同規舟翠規 報 堂々峯堂

耕雀義青園青藤小耕義子友雀友秀介藤雀藤田 之踊 選 太松之 選 踊 選太踊太 介子秋路 路郎園介秋 帆子帆夫 郎子郎邊

3 の▼頭つ類▼ し倒 T 耽 -( > 川君 1 (I b. 3 柳は 音數十 氏 h 折だ。 0 M 抦 直い 必自律七 1: 讀由の字 75 や律 基再 東京句會 乞川本檢 ふ柳理討 00 論 擦にと

句

集

潮

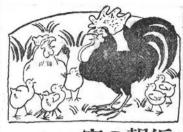
騷

5

反

響

別一▼る更茲無意本あ▼ 次にに 耽周十 つ創 事と 第今 忌 心本柳 月二 で後か年友 -1-5 當 あの を諸 幸愈 周 る十 3 御な 送兄ひ 17 年 鞭撻と の七 寄贈 0 で H 御稿進 11 家を 3 本伊 御のが顧 諸續 意出に を號 RE 摆 氏け 掲げ を表し 助 0) 愚陀 7 0 御來た げる陀 を祈 0 15



窓の 18 Ш

立▼筆三風談

新を太格

年味郎に

7

頂

つと接

3 3

きれ感るたかに

同

東京のある。

君未柳

の來人

オのの

本▼れ

3

II

3

社亂

の耽

句

してい

餘 は

とし

の里す

好

古氏

0 4.

JII 原稿

柳

天神

起」も

2 藤 たか

11

6 1

も魅くな

v .

0

7

る 號

既に クジ

寄

44

6 計

2

7:

れ畫

るが、色

淋處里鮎▼に氏深家した十美十有がきで 子三 次 拓第か なあ 句▼ を十美十有が 三日 10 かいうの \$ 會 つであ 意特 0 九 君 H あ O V 日の本社句 たかお と里 義に市り で 君 あ 5 12 で植物別 邪腹に九 な満て、植物に 6 る。 4. かの 3. してく 句舎では の病 居で れ坊 した 當 意柳のか 許會を明 て頂き、 て頂き、 b L 氣 けで 同里 p. n たと快く迎がまるが、 支支 2 丹路、 1: はの 水創

> はるあ立車 こるが準の tsn 非 75 備奔 がの盛會 から かれた えたた 長に闘 で路 潑 ٤ えら 猫 0 L 以樂部 で 柳の 關 して T 郎 n の同人出席さ L -( 主 あ 以 る。 幹 7 恶 る 前 人柳 + 會 8 1: か 4 當 n 造 3 0 0 5 7 塢 伦 2 創 支

> > と會ら

な的れ

れ動當

でおた

次愈 3

に選

マれ推

n

又

6

議

員ち

世

はに黑▼益あ句室▼項人▼での掌會が滿▼賬氏當部▼益さ 蓋初地本なつ會で二基社十あ話」と休洲二かが夜句二なれ 二其社十ある題十他友七る題 ? 代に社おたが る題 川金の話が開萩柳色社も路かの 六は旬日 れ柳色社 た翁の章も郎れた 茶禿西が夜 主な。支属のか湊 肖 つ出て **育つ出て幹。支**像た來盛が生部 のメれ町 倉で出席 嘴なるだ。 憎創 11 æ た 俱 用の 立 牛 0 樂 裝 に協部 雨 N あ 3 / た闘禎つれて周奥譲議事の象はた有は年茶る事 藏 7 る事同

迎宴 宴が催いれた ての 5: 盡 お御 きな れる旅 江方部 さ散 7:江 會ので か n 1: 2 み句 つるは 7 7: 歡迎 さう した 出席 L 洲 句君 二氏がしい身體にこれにからう。 であらう。 であらう。 であらう。 であらう。

ルて頂いた 一二氏は是非今晩中に歸りた まえて勝手な熱をあげた まえて勝手な熱をあげた も送る途中櫻橋の で、路郎先生と 不朽洞を訪問、不朽洞を訪問、不朽洞を訪れて頂いた。 東に大阪驛へは足がいとのことなる。 東に杯を暖めいた。 大ので端のたた。 大ので端のためで、 大ので端のためで、 大ので端のためで、 大ので端のためで、 大ので端のためいた。 と想路氏同郎た氏▼更 一人では 酒にて 不朽洞を のを郎等車 主 0 述主 質て 专出 大行の暖め いわけ親訪用十 共大 カ行記 かられて、 かられて、 かられて、 かり別れて、 ので、 かられて、 かられている。 見席 15 1 驛 れみ 3 來日 L 僕も溪 か念 作られ 溪 1: 阪名 僕 らそ 花 句 0 をくぐつて. 古古 氏の午久路れ屋 會本時 H 莊 花坊况 巨豪をは同じところ し郎たの 先機森 振 ٤ V) 生 會田 捉職を頃の ٤ 1--

此 0 程 志合 かの 推玉 評 薦 出

として

で興

暇

開歸

で行

一十三

つ日

### 投句は總て葉書 稿 規 定

種各題 「近作柳樽」は全作 認めい 家の雑吟を募る かた明 に同型の厚紙に各 記す 住所氏名雅 必ず別紙に ,る事。

各地會報は牛紙判 「川柳塔」への投句 は同人に限 原稿紙に 清部 る 0

▼文章は二十字語 紙判原稿 紙に詰め

膝

頟

號

書體はなるべく楷 封筒に朱記する 川柳雜誌原稿

締切は殿守された

投稿其他につき御 問合はすべて返信 対入の 事。

募

集

# 卷第二 十二月五日締切 號

各 題十句以內

中 朝 澤 田 新 濁 水選 水選

▲向

繃

帶 上

•

御注 但集金郵

文には

便

卷 第三號課題

月五日締切

各

(題十句以內)

+

須日 崎野 H 豆華 溪 秋水 耽選 選共

昭

和

八年十二月

日發行

( 毎 日十

一卷回

行號

和八年十

一月廿五日印刷

縣

51

各地柳壇(會報) 近作柳樽 十世 行吟 麻 生 路

郎

選

發

行

大阪市

西成區玉

出本通三丁目三六番地

編

輯無發行印刷人

大阪市西

成區

出

生 幸 二

郎

▲文 章(評論研究感想吟行漫文)

事

務

阪

市住

吉

區平野

一西之町

八三番地 話天下茶屋二五

一七九番

雜

誌

電話天王寺一一六七番振替大阪七五〇五〇番

耐

社°。 務所宛に願ひます。 讀廣告) 切。 (編輯に關する件・ 用件は下記川柳雑誌社 事。購

定

價 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢 半箇年前金(特輯處共)壹圓八拾錢 部 念 拾

料

(一年分)には定價の外に手數料十錢を申し受けます 便を差立てますが御不在中にでも頂ける様に願ひます、 に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます》 實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願 W 御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない 何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して 御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へ お拂込みになるの 御希望により集金郵 ひます

店書捌賣 (大阪) 京都)三宅

東東仲見世)玉森堂 大賣捌 (名古屋) 靜觀堂 二盛社 (神戶) 過書店 米田、 (明文堂 寶文館

其

他

市內

各書店)

(函館)

錢 告廣

本誌 ば御相談に應じます ましては本社へ直接 報下さいます の廣告に 就き

5: 送本封紙

番

確

**-(72)-**

## (Milasu) 々人の係關社誌雜柳川

紅人裡人峰水夢水石路州

 宋淺赤藤藤國長長長田嘉笠片岡大長池 助 弘田井本村枝野岡崎中納原岡本道河 殿 明 中 中 東 市 太 一 東 市 太 柳 辰 路 直 一 弘 一 樂 郎 一 司 助 作 耶 濱 耶 秀 二 純 生 方 平 雄 徹 居

前前安長窪谷田吉米川川龜岡大大鳥伊 田田川野田脇村田村上井田谷島山藤 久田田大大島 本本 本 表 画 花 本 表 画 花 本 表 画 花 花 本 彦 健耶美高樓文介清馬菱耶修子村明步造

同

中中中立谷大友西西市石岩 森藤蛭篠柴 澤見西井村西淵村村沒根 里子原谷 濁光 ž 美 八貴明山食民 東好省春柴 水路 む坊稔步山珠月子郎路 魚古二雨舟

底 生 住 麻福福松山橋 生 幹 田生田山町丹線 郎 耽 乃 峰 樓 二 路雨

議員司(理事) 住 萬 本 雅 幽 生 水 幽 生 水

## Ш 柳 雑誌 案 內

ごに金十銭(但し前金切手代用可) 大號活字十四字語三行金五十銭、一行増すど 移轉:句會案內、柳崇廣告. その他

# 年賀 名刺廣 告察 3

五

拾錢

原稿はなるべく簡單に願ひます希望の方に限り金七圓。一日分幾日でも申込んで下さい。一頁 申込期限十二月十日迄 月號に掲載)

]1]

柳

き

や

1)

大阪 市 住 巷 柳 吉區 平 七五〇五 野 西之町八三 誌 社

刊

部廿五錢郵稅

錢

川柳きやり吟社東京淺草小島町

菊判每號七十數頁

廣告申 下の 用の上前金 切 手 込 は成る 代 に願ひます(三錢以 用でも 大阪 べく振替を御利 差支ありませ 番の中

電 話

話

開

通

## 11 柳 雑 誌 投句用

五○枚綴二冊 價金拾二銭でお頒ち致します。なるべく此でお頒ち致します。なるべく此でお頒ち致します。なるべく此の質額 御申 (一錢切手代用不苦) (送)料 中 共變

雷

守口二二五番

大阪市外守口

町車

水庫裏

田

電 話 開

通

話 東七五 五番

電

大阪市東區粉川町 翠町 夢六

喫 茶 左 キン 大阪市西成區玉出本

か h

Ŀ

大阪市 万 南 庄 區新 萬 戏橋 2 南語

ょ

電話 茶屋 二五七九番 出本通グ 來に附本

(合本) 金壹圓

致します。 左柳 の確認 段で 御入用の 50

號し 號 # いなり 六號 號九號 號 各第 一七號はありる 部 0 七號迄 おりまな拾錢

で廿つ

題

ストーブ

一月十五日締切

(喫茶

柳

懸賞喫茶柳壇

▼用紙 官製ハガキ(咖壇と明記の事) 環と明記の事)

九

呈す

# 短 雏册 頒

・ 「大阪七五〇五〇番」の方はお知 作品は入金順に登送、振替は 「大阪七五〇五〇番」を利用されたし、何の希望の方はお知 らせ下さい) 八大 川三香 柳番地 短難地 誌 册社 吉 lan. 事 4 頒務 野 所有內 西 之町 係

011 大阪市玉出土 手

拭 茶 種

本通三 の三 新 金三拾錢 路郎主幹 送料共 聞六 配

第二卷 第二卷 第二卷 ふさはしい簡素な装幀に出、(金文字入)で書架を飾る ました。 各金参圓 各金參圓

社

告

(V)

方は

左

各送料十八錢 V) 五拾錢 也也也 題 本社 記へお知らせなお願ひします 大阪市住吉區旭町三ノ 「麗人 の例 黨 會報係 會案內希望 JI!

柳

須崎

豆秋

DU

十二月十 粧路 路募集 新郎 Ė 聞氏 締郎 切 宛六 柳

# 酒

# 淸

白

鶴

禮

讃

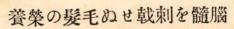
白鶴の 來意も 午後六 白 腰 百 白鶴をチント 掛 鶴 事 から 機嫌へ 聞 意 時 かず 緣 白 0 H 鶴が とは 押す子曳 ンシ 父 鹤 如 白 狹 ٤ 鶴 待ち ヤン なり 5 白 な 0 1 鶴 吞 と提げて來る 飲む 妻 82 3 0 猪 んであ 君 П 出 から T を強ひ うまさ ٤ す 待 寢 僕 7 3 5

插津灘

嘉納合名會社釀



111



# 一一才术椿豆伊

